四街道市嶋越遺跡(1)

古墳時代以降編

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XⅦ —

平成26年9月

独立行政法人　都市再生機構

公益財団法人　千葉県教育振興財団

四街道市嶋越遺跡(1)

古墳時代以降編

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XⅦ —

序　文

公益財団法人千葉県教育振興財団は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第732集として，独立行政法人都市再生機構の物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市嶋越遺跡の1冊目の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，縄文時代後期を主体とする多量の土器や奈良・平安時代の集落跡などが検出され，この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。本書はそのうち，古墳時代以降の調査成果を報告するものです。

刊行に当たり，本書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成26年9月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　堀田弘文

凡　例

1　本書は，独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県四街道市物井字嶋越 464 ほかに所在する嶋越遺跡（遺跡コード 228 －023）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，独立行政法人都市再生機構の委託を受け，公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は第１章に記載した。

5　本書は主任主事 大岩桂子が執筆し，主任上席文化財主事 井上哲朗がとりまとめた。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，四街道市教育委員会，独立行政法人都市再生機構の御指導・御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/25,000 地形図「佐倉」（NI-54-19-14-2）（平成 10 年発行）

第９図　国土地理院発行　1/50,000 地形図「佐倉」（NI-54-19-14）（平成 10 年発行）

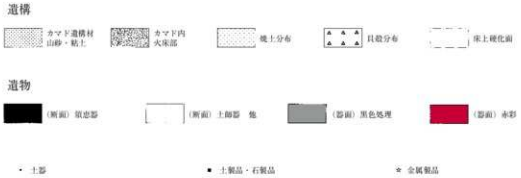
同　　「千葉」（NI-54-19-15）（平成９年発行）

第２・３・５～８図は，独立行政法人都市再生機構作成の物井地区現況図を加工して使用

8　図版１の遺跡周辺航空写真は，京葉測量株式会社による昭和 44 年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した座標はすべて日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）で，図面の方位はすべてその座標北を示す。

10　遺構内の土層や遺物の性質等の表現は，以下のとおりである。



目　次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要 …… 1
　　1　調査の経緯と経過…… 1
　　2　調査の方法と調査概要…… 2
　第２節　遺跡の位置と環境…… 11
　　1　遺跡周辺の地形…… 11
　　2　周辺の遺跡…… 11
第２章　遺構と遺物…… 15
　第１節　概要…… 15
　第２節　竪穴住居跡…… 15
　　1　古墳時代…… 15
　　2　奈良・平安時代…… 17
第３節　その他の遺構と遺物…… 47
　　1　掘立柱建物跡…… 47
　　2　調査区北半部の遺構…… 48
　　3　調査区南半部の遺構…… 50
　　4　遺構に伴わない遺物…… 62
第３章　まとめ…… 69
　第１節　調査成果の概要…… 69
　第２節　灰釉浄瓶および上総型土師器杯について…… 71

報告書抄録…… 巻末

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の地形…… 3
第２図　物井地区遺跡分布図…… 4
第３図　嶋越遺跡年度別調査区域図…… 5
第４図　グリッド設定法…… 6
第５図　嶋越遺跡トレンチ配置図…… 7
第６図　嶋越遺跡遺構検出状況全体図…… 8
第７図　遺構検出状況部分図（遺跡北半部）…… 9
第８図　遺構検出状況部分図（遺跡南半部）…… 10
第９図　周辺の遺跡分布図（奈良時代～中世）…… 13
第10図　SI-016・017及び出土遺物…… 16
第11図　SI-008及び出土遺物…… 18
第12図　SI-009及び出土遺物…… 19
第13図　SI-010及び出土遺物…… 21
第14図　SI-011及び出土遺物…… 22
第15図　SI-012及び出土遺物…… 23
第16図　SI-013及び出土遺物（１）…… 24
第17図　SI-013及び出土遺物（２）…… 25
第18図　SI-014及び出土遺物…… 26
第19図　SI-015及び出土遺物…… 27
第20図　SI-018・019及び出土遺物…… 28
第21図　SI-020及び出土遺物…… 30
第22図　SI-021及び出土遺物…… 32
第23図　SI-022・023及び出土遺物…… 33
第24図　SI-024・025及び出土遺物…… 35
第25図　SI-027及び出土遺物…… 36
第26図　SI-028・029・030及び出土遺物…… 37
第27図　SI-031・032・034及び出土遺物…… 39
第28図　SI-033及び出土遺物…… 41
第29図　SI-035・036及び出土遺物…… 43
第30図　SI-037及び出土遺物（１）…… 44
第31図　SI-037及び出土遺物（２）…… 45
第32図　SI-038及び出土遺物…… 46
第33図　SI-039及び出土遺物…… 47
第34図　その他の遺構（１）…… 48
第35図　その他の遺構（２）及び出土遺物…… 49
第36図　その他の遺構（３）及び出土遺物…… 51
第37図　その他の遺構（４）及び出土遺物…… 54
第38図　その他の遺構（５）及び出土遺物…… 56
第39図　その他の遺構（６）及び出土遺物…… 59
第40図　その他の遺構（７）及び出土遺物…… 61
第41図　遺構外出土遺物…… 63
第42図　古代集落変遷図…… 70

表目次

第１表　嶋越遺跡竪穴住居跡一覧表…… 64
第２表　嶋越遺跡竪穴住居跡出土土器観察表…… 65

図版目次

図版１　遺跡周辺航空写真

図版２　調査前遠景，調査区中央部建物敷地部分，調査区中央部

図版３　SI-008・同カマド・同遺物出土状況，SI-009･017，SI-009カマド，SI-017カマド，SI-010，同カマド

図版４　SI-011・同カマド，SI-012・同カマド，SI-013・同遺物出土状況・同カマド，SI-014

図版５　SI-014カマド内遺物出土状況・同カマド，SI-015・同カマド，SI-016，SI-018，SI-019・同カマド

図版６　SI-020・同カマド内遺物出土状況・同カマド，SI-021・同遺物出土状況・同カマド，SI-022・同遺物出土状況

図版７　SI-022カマド，SI-023カマド・同カマド内遺物出土状況，SI-024・同カマド内遺物出土状況，SI-025・同カマド，SI-027

図版８　SI-027遺物出土状況・同カマド，SI-028，SI-029カマド，SI-030・同カマド，SI-031・同カマド

図版９　SI-032・同カマド，SI-033・同カマド，SI-034カマド，SI-035･同炭化物出土状況，SI-036

図版10　SI-036遺物出土状況・同カマド・同煙道断面，SI-037・同遺物出土状況，SI-038，SI-039，SB-002

図版11　SK-001，SK-013遺物出土状況，SD-001，SD-002，SK-004，SK-005，SK-006，SK-011

図版12　SK-014，SK-037，SD-007，SD-009，SX-013，SX-010，SK-031，SK-032

図版13　SK-033，SK-034・同人骨出土状況，SX-011，SK-021北部･SK-038，SK-038，SK-021・038，SX-012

図版14　SK-035，SK-036，SK-020･同遺物出土状況，SK-018・019，SK-050，SK-052，SK-053

図版15　住居跡出土遺物（１）

図版16　住居跡出土遺物（２）

図版17　住居跡出土遺物（３）

図版18　住居跡出土遺物（４）

図版19　住居跡出土遺物（５），その他の遺構出土遺物

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査の経緯と経過（第1～3図）

四街道市は，県都千葉市に隣接するとともに，東京都と新東京国際空港を結ぶJR総武本線や東関東自動車道などの交通網が整備されたことなど，その利便性から近年人口増加が著しく，宅地の安定的供給が期待されている地域である。

住宅・都市整備公団（現・独立行政法人都市再生機構，以下「公団」という）では，JR総武本線物井駅と既存の『千代田団地』の間に広がる約95.7ヘクタールの地域において物井地区土地区画整理事業を計画した。事業の施行にあたり，区域内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育庁文化課（現・教育振興部文化財課）と公団とのあいだで協議が重ねられた結果，一部について緑地・公園として現状保存するほか，大半の区域についてはやむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり，発掘調査は財団法人千葉県文化財センター（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）が受託して実施することとなった。

物井地区の台地上には，ほぼ全面にわたって遺跡が分布している（第1・2図）。記録保存の対象とされたのは，今回報告する嶋越遺跡をはじめとして，小屋ノ内遺跡，稲荷塚遺跡，御山遺跡，新久遺跡，出口遺跡，出口・鐘塚遺跡，棒山・呼戸遺跡，高堀遺跡，館ノ山遺跡，北ノ作遺跡，郷遺跡，中久喜遺跡であり，昭和59年5月に棒山・呼戸遺跡の調査が開始され，以後断続的に発掘調査が実施されている。現状保存される遺跡は古屋城跡と出口遺跡内の古墳群の一部となる。

今回報告する嶋越遺跡の発掘調査は，平成20年度から平成22年度にかけて断続的に実施された。調査対象地の面積は13,602㎡である。各年度の調査範囲は連続しており，北から調査区（1）・（2）・（3）とした（第3図）。

年度ごとの組織，発掘調査期間，担当者などは以下のとおりである。

平成20年度　調査区（1）

調査研究部長　大原正義

北部調査事務所　所長　豊田佳伸

調査期間　　平成21年2月16日～平成21年3月25日

調査面積　　（規模）1,652㎡　（確認調査）上層167㎡／1,652㎡

（本調査）上層260㎡

調査担当者　上席研究員　土屋潤一郎

平成21年度　調査区（1）

調査研究部長　及川淳一

北部調査事務所　所長　野口行雄

調査期間　　平成21年4月6日～平成22年5月20日

調査面積　　（規模）990㎡　（本調査）上層990㎡

調査担当者　上席研究員　土屋潤一郎

平成 21 年度　調査区（2）

調査研究部長　及川淳一

北部調査事務所　所長　野口行雄

調査期間　　平成 21 年 7 月 1 日～平成 22 年 2 月 26 日

調査面積　（規模）5,850㎡

（本調査）上層 3,820㎡

調査担当者　上席研究員　土屋潤一郎・糸川道行・蕃　淳一

平成 22 年度　調査区（3）

調査研究部長　及川淳一

北部調査事務所　所長　野口行雄

調査期間　　平成 22 年 7 月 1 日～平成 22 年 7 月 30 日

平成 22 年 8 月 31 日～平成 22 年 12 月 8 日

調査面積　（規模）6,100㎡　（確認調査）上層 622㎡／6,100㎡・下層 25㎡／920㎡

（本調査）上層 2,490㎡

調査担当者　上席研究員　田井知二

面積については，調査対象面積及び完了面積は 13,602㎡である。上層確認調査面積は 1,407㎡，上層本調査面積は 7,560㎡，下層確認調査面積は 25㎡，下層本調査面積は 0㎡である。確認調査面積及び本調査面積の合計は 8,992㎡である。上層本調査は，主に台地上の攪乱部分と急斜面部を除いた範囲である。

嶋越遺跡の遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡が主体であるが，遺物については縄文時代中・後期の土器が主体であり，膨大な量が出土している。そのため整理作業については，縄文時代を主体とする作業と，古墳時代以降を主体とする作業とに分けて実施した。

本書は古墳時代以降を主体とする報告であり，整理作業内容もその分を記述する。

平成 23 年度　調査研究部長　及川淳一

北部調査事務所　所長　野口行雄

整理期間　　平成 23 年 9 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

整理内容　　水洗・注記～原稿執筆

整理担当者　主任主事　大岩桂子

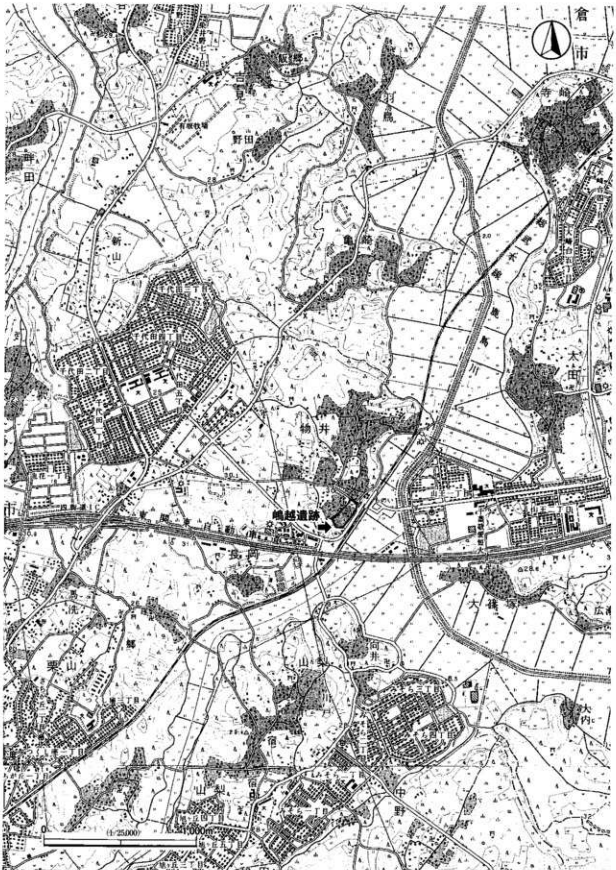
平成 26 年度　調査研究部長　伊藤智樹

整理課長　　今泉　潔

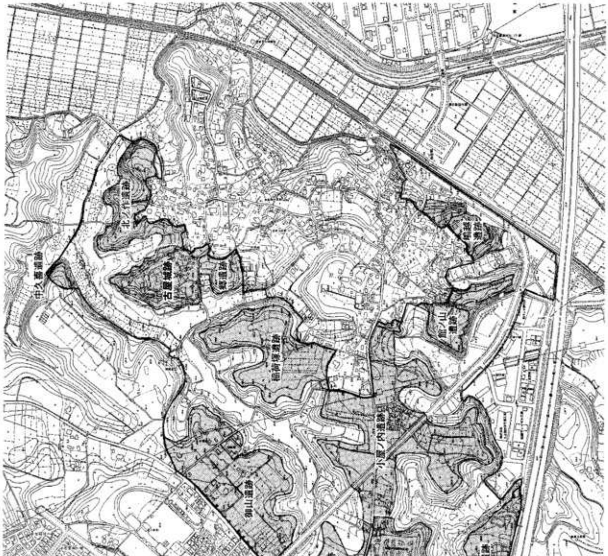
整理内容　　編集・報告書刊行

2　調査の方法と調査概要（第 3 ～ 8 図）

物井地区では，事業範囲全域を公共座標（日本測地系‥国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づく方眼網で覆って調査を行っている。方眼は 50 m × 50 m の区画を大グリッドとし，名称は包含網の北西角を起点にして，東へ 1・2…，南へ A・B…として，31 T のように両者を組み合わせて大グリッドの名称としている。その内部を 100 分割した 5 m × 5 m の区画が小グリッドで，北西隅を 00，南東隅を 99 としている（第 4 図）。00 を起点に東へ 01・02…，南へ 10・20…と振っており，大グリッドと組み合わせて 31U-06 のよう

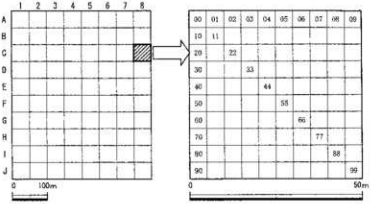


第１図　遺跡の位置と周辺の地形



第２図　物井地区遺跡分布図

第３図　鳴越遺跡年度別調査区域図



第４図　グリッド設定法

に表記される。遺構・遺物の位置は，この方眼網に基づいて記録した。遺構・遺物の標高は，東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ．）からの海抜高で記録した。

嶋越遺跡の基準点の一つで，調査対象範囲の比較的中央に位置する31U-02（平成21年度調査区内所在点）は，日本測地系座標でX=-35,250.0000,Y=33,360.0000である。世界測地系はJGD2000系変換値で，X=-34,894.7809，Y=33,066.2985，北緯35°41′05.72085″，東経140°11′55.16835″である。

平成20年度は，平成21年２月から３月にかけて，1,652㎡を対象に上層の確認調査を実施した。対象範囲は遺跡の最も北側の部分であり，調査区（１）とした。地形は東から西に下る緩斜面である。その結果，遺構については奈良・平安時代を主体とする竪穴住居跡が東西両端部を除いて広範囲に検出された。本調査対象面積は1,250㎡と決定されたが，平成20年度についてはその一部260㎡についてのみ調査を実施し，奈良・平安時代の竪穴住居跡１軒と中世の溝状遺構１条が調査された。遺物については，奈良・平安時代の土器も出土しているが，遺物包含層から縄文土器が多量に出土した。なお下層調査については，調査区（１）全域にローム層が遺存しないため，必要なしと判断された（第３・５～７図）。

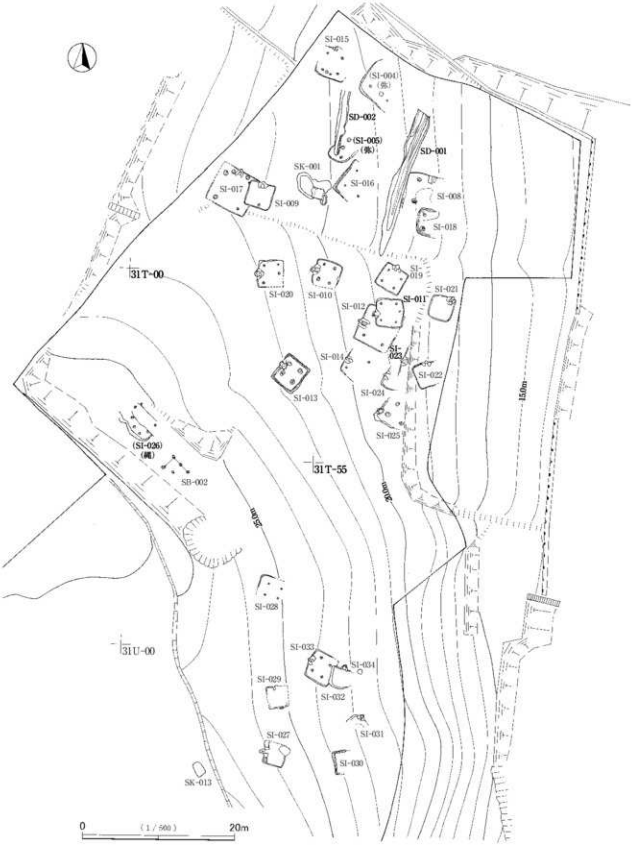
平成21年度は，調査区（１）の本調査範囲1,250㎡の内，残る990㎡の本調査を実施した。その結果，奈良・平安時代を主体とする竪穴住居跡18軒などの遺構が調査された。引き続き，調査区中央部分（調査区（２））の調査を実施した。地形は西側に若干の平坦面があるが，多くは（１）同様，西から東に下る緩斜面である。縄文時代早期から晩期にかけての遺物包含層600㎡が調査され，多量の縄文土器のほか，土偶・耳飾等の土製品が出土した。また奈良・平安時代の竪穴住居跡９軒その他の遺構が調査された。平坦面は地形が改変されて粘土層が露出していたが，中・近世の土坑・井戸等が検出された。なお，下層調査については，調査区（１）同様，全域にローム層が遺存しないため，調査対象から除外された（第３・５～８図）。

平成22年度の調査対象地は調査区南側部分（調査区（３））である。地形は調査区北側に若干の平坦面があるが，中央から南側にかけては北から南に下る斜面となる。調査の結果，縄文時代の遺物包含層２地点，奈良・平安時代の竪穴住居跡７軒，中・近世とみられる土坑・ピット数10基等が検出された。平坦面の大部分は削平と建物の基礎等による撹乱が激しく，若干の遺構を確認したにとどまった。下層については，確認グリッドでⅢ層から１点の石器が出土した。周囲を拡張して調査したが，ほかに石器の出土はなく，本調査は不要と判断された（第３・５・６・８図）。

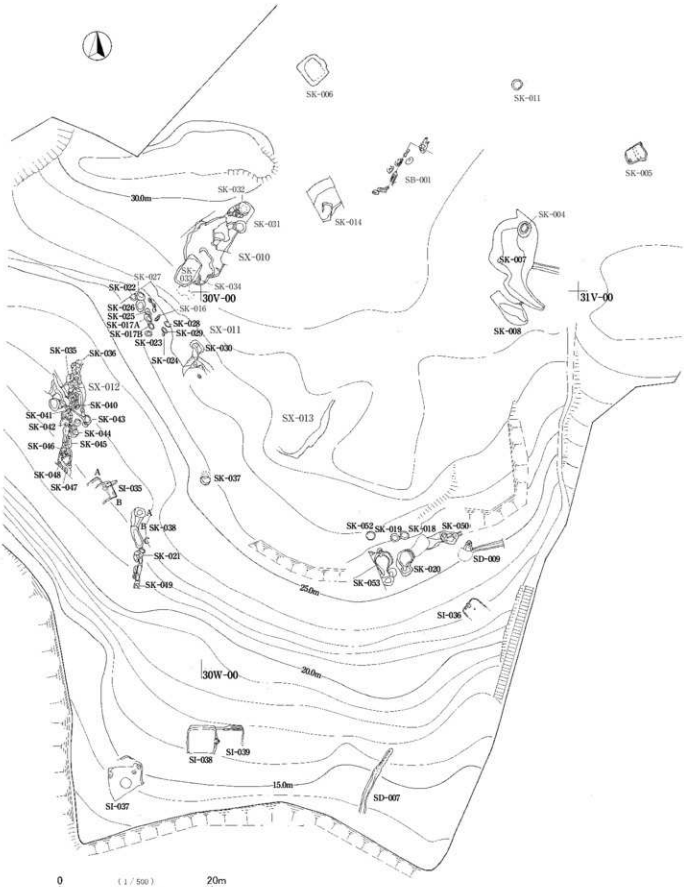
遺構番号は，遺構の種類ごとに001から始まる３桁の数字を付与し，数字の前に遺構の種別を表す略記号を付けた。略記号は，竪穴住居跡がSI，掘立柱建物跡がSB，土坑・土坑墓・井戸・台地整形区画がSK，溝状遺構・道路状遺構がSD，その他の種別がSXであり，SI-001，SK-001のように呼称した。整理作業では調査時の名称を継承し，本書でも遺構番号の変更はしていない。

第５図　嶋越遺跡トレンチ配置図

第6図　嶋越遺跡遺構検出状況全体図



第７図　遺構検出状況部分図（遺跡北半部）　　（ ）付遺構は本書では扱わない



第８図　遺構検出状況部分図（遺跡南半部）

本書で扱う遺構および番号は次のとおりである。古墳時代～平安時代竪穴住居跡32軒（SI-008～025・027～039〈SI-035はA・B２軒〉）・掘立柱建物跡２棟（SB-001・002），中・近世台地整形区画（土坑群）６箇所（SK-007・010～013・020を含む周辺部）・井戸２基（SK-004・032）・土坑墓４基（SK-018・019・034・052）・土坑42基（SK-001・005～008・011・013・014・020・021A～I・031・033AB・035～037，038A～C・039～049・050・053，SD-009に重なる遺構番号なし２基）・溝状遺構４条（SD-001・002・007・009）・ピット約30基（SX-011・012内，遺構番号なし）である。抜けた番号は，縄文・弥生時代の遺構或いは調査中に遺構ではないと判断され欠番となったものである。

第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡周辺の地形（第１・２図，図版１）

水郷地帯といわれる現在の利根川下流域は，近世初頭まで香取海といわれる内海であった。内海の名残が現在もこの地域に点在する大小の湖沼であり，千葉県においては印旛沼がその最大のものとなる。四街道市は，印旛沼の西半部に流れこむ手繰川と鹿島川（の支流小名木川）の源流部に位置し，市域の北端部に当たる物井地区の遺跡は両河川の上流部にはさまれた洪積台地上に所在する。台地上は，東西の両河川へ続く小支谷によって浸食され，樹枝状の複雑な地形を示す（第１・２図，図版１）。

嶋越遺跡は，物井地区の南東端部に位置し，遺跡の東から南の半分ほどは，鹿島川が開析した沖積低地に接する傾斜地となっている。現在の鹿島川からの距離はおよそ350ｍ～400ｍである。遺跡の西側には，北西方向に延びる小支谷が浸入し，館ノ山遺跡との間を限っている。遺跡の北西方向には平坦な台地が続き，物井の中心集落が存在するが，その起源は平安時代の集落にまで遡るものと推測される。

嶋越遺跡が立地する地形は，中央が平坦部で，標高は28ｍ～29ｍである。ただし地層の状況から，かなり削平されていることがうかがえ，当初の標高はこれより幾分高かったとみられる。削平は，近世以降の家屋の建設や近代の開発によるものと思われる。中央の平坦部からその北東及び南西方向の地形は傾斜面となる。北東方向の斜面最下部の標高は12ｍ～25ｍ，南西斜面の標高は12ｍ～28ｍである。

嶋越遺跡の南側はやや急な斜面であり，一部に段整形がみられる。中世の築城に伴う地形改変の可能性も考えられたが，台地中央部などでその後の地形改変が著しく，中世陶磁器の出土も少ないため，明確なことはいえない。一方，台地平坦部から北東側は緩斜面である。一部に段差がみられるが，中世の台地整形か否か不明である。

２　周辺の遺跡（第２・３・９図）

印旛沼に四方から流入する諸河川の流域には，旧石器時代から近世まで，各時代の遺跡が多数存在している。鹿島川・手繰川流域も例外ではなく，弥生時代から古墳時代の遺跡としては，鹿島川下流部の寺崎遺跡（弥生時代集落）・大崎台遺跡（弥生時代環濠集落）・江原台遺跡（古墳時代集落），手繰川下流部の飯郷作遺跡（古墳群）（以上佐倉市），四街道市物井地区にも物井古墳群や館ノ山遺跡（古墳時代集落）などがあり，後述するように，奈良・平安時代集落や中世城館跡も数多い。物井地区より北側の鹿島川と手繰川にはさまれた台地上にはほぼ全面に，いずれかの時代の遺跡が存在するといってよい。

本報告書では主に古墳時代終末期から奈良・平安時代の集落を扱うが，この時代の遺跡もきわめて多い。そこで物井地区における同時期の遺跡についてのみ簡単にみておきたい。

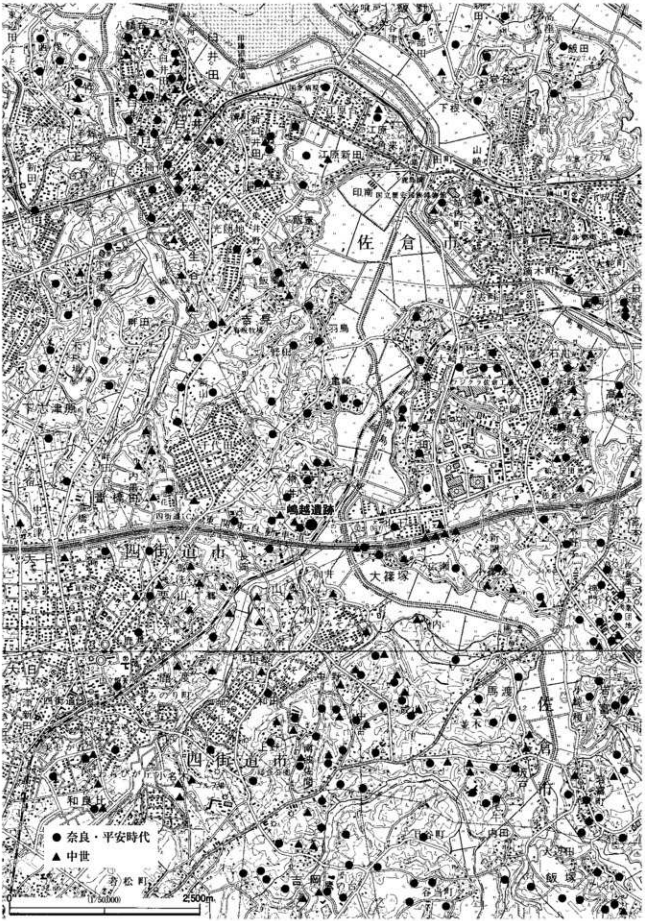
物井地区内の遺跡において，古墳時代以降の集落の立地は，古墳や方形周溝状遺構などの埋葬遺構の立地とは顕著な対照を示す。物井地区北東端部から南西方向に侵入する不動谷と呼ばれる谷があるが，集落遺跡はこの谷の東側の台地上に限られる。不動谷の西側の台地上では，新久遺跡で弥生時代後期の住居跡18軒，中久喜遺跡で古墳時代前期の住居跡5軒が検出されたが，古墳時代後期以降の住居跡は1軒も出土していない。これに対し埋葬関係の遺構は，御山遺跡で古墳時代後期から終末期にかけての古墳11基，奈良・平安時代の方形周溝状遺構23基，これと同時期とみられる有天井土坑15基が検出され，新久遺跡・出口遺跡・清水遺跡・出口鐘塚遺跡では，物井古墳群と総称され，合わせて38基の後・終末期古墳が発掘されている。一方，不動谷の東側に当たる台地上では，小屋ノ内遺跡で円墳4基と小規模な円形周溝状遺構2基，稲荷塚遺跡でも同程度の円形周溝状遺構2基が検出された程度である。

不動谷の東側の遺跡で発掘調査された竪穴住居跡は，小屋ノ内遺跡で古墳時代後期11軒，奈良・平安時代283軒（掘立柱建物跡142棟），稲荷塚遺跡で古墳時代後期11軒，奈良・平安時代229軒（掘立柱建物跡53棟），館ノ山遺跡で古墳時代前期2軒，中・後期71軒，奈良・平安時代9軒，郷遺跡で奈良・平安時代12軒，北ノ作遺跡で弥生時代後期～古墳時代前期32軒，古墳時代後期3軒，奈良・平安時代11軒と膨大な数に達する。

古墳時代後期の集落としては館ノ山遺跡が最も大きく，物井古墳群の造営主体であった可能性が高い。古墳時代後期から終末期にかけて，暦年代では6世紀後半から7世紀前半にかけて，集落からかなり離れた土地が埋葬地として選定されたようである。物井古墳群の分布地域は不動谷の谷奥，手繰川水系からも遠い分水嶺上に位置し，水田面からは最も遠く集落立地として適さないことなどから，埋葬の地に定められたのであろう。一旦古墳群が形成されると，不浄の地としての認識が定着したためか，奈良・平安時代になっても集落が営まれることはなく，引き続き埋葬地としての利用が継続された。中世以降の居住の痕跡も確認されず，御山に真言宗の密教道場である金剛寺が営まれた以外は，放牧地などとしての利用にとどまったようである。

奈良・平安時代の遺跡は，各河川を臨む台地縁辺を主体に数多く分布する[1]。物井地区での集落遺跡では，小屋ノ内遺跡・稲荷台遺跡が集落規模や小屋ノ内遺跡出土墨書土器などから，「下総国千葉郡物部郷」（『和名類従抄』）の中核集落であったことが推測されている。不動谷東側の小屋ノ内遺跡・稲荷塚遺跡・郷遺跡・館ノ山遺跡の集落遺跡のさらに東側には江戸時代から今日に至る物井集落があって，都市再生機構の開発区域外になっているが，そこにも奈良・平安時代以降の集落が展開していたようである。例えば，鵜越遺跡と郷遺跡の間は直線で500 mほどあるが，その間の現集落の位置にも連続していたと考えられる。面積的には，小屋ノ内遺跡と稲荷塚遺跡を合わせたほどの古代集落が現集落下に存在したと想定しても大きな誤りはないだろう。また，約2.5km南方の中台地区の権現堂遺跡では，奈良・平安時代と中世の大規模集落が検出されている[2]。

中世では，鹿島川流域の両岸に城館が多く存在し，特に臼井地区や山梨地区に多く，台地整形区画などの集落遺跡も中台遺跡群などで検出されている。物井地区の北東端部には北ノ作遺跡と古屋城跡，南東端部には館ノ山遺跡という中世後期の城館跡があって，これらの遺跡に南北を限られた区域が，中世においても物井集落の中心部であったことを物語る。なお，戦国期の史料では，千葉氏の家臣として妙見宮遷宮の従者として，臼井氏一門をはじめ，志津・栗山・山梨・中台・蕨（和良比）・小舟木（小名木）等の現四街道市南部の地名を家名とする諸領主が確認でき，遺跡分布の傾向と一致する。



第９図　周辺の遺跡分布図（奈良時代～中世）

物井地区の当財団による既刊報告書は，以下の注のとおりである[3]。また，平成22年度には，当財団調査区の北側隣接区で，市道建設に伴う（財）印旛郡市文化財センターによる発掘調査が実施され，縄文時代早期・後期から晩期包含層と古墳時代竪穴住居跡1軒が検出され，遺構は伴わないが中世陶磁器類も出土している[4]。

注1　第9図周辺の遺跡分布図は，主に下記文献を基に作成した。

千葉県教育委員会　1997『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）－東葛飾・印旛地区－（改訂版）』

同　1999『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）－千葉市・市原市・長生地区（改訂版）－』

2　高橋　誠　2004『極現堂遺跡－四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査（Ⅱ）－』（財）印旛郡市文化財センター

3　渡邉修一ほか　1994『四街道市御山遺跡（1）　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』

岡田誠造　1999『四街道市出口・鍾塚遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』

古内　茂・田中　裕　2005『四街道市小屋ノ内遺跡（1）旧石器時代編　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』

糸川道行・大内千年・岸本雅人ほか　2006『四街道市小屋ノ内遺跡（2）　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』

糸川道行ほか　2007『四街道市小屋ノ内遺跡（3）　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』

沼澤　豊　2008『四街道市鄽遺跡・中久喜遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』

糸川道行・岸本雅人ほか　2009『四街道市稲荷塚遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』

沼澤　豊　2009『四街道市清水遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』

糸川道行・小林信一ほか　2011『四街道市館ノ山遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』

沼澤　豊　2011『四街道市新久遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』

落合章雄　2011『四街道市清水遺跡・新久遺跡　旧石器時代編　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅠ－』

沼澤　豊　2012『四街道市出口遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』

鳴田浩司・黒沢　崇ほか　2013『四街道市北ノ作遺跡　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ－』

野口行雄　2013『四街道市出口遺跡　旧石器時代編　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ－』

大岩桂子ほか　2013『四街道市館ノ山遺跡（2）　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅤ－』

沼澤　豊　2013『四街道市御山遺跡（2）　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ－』

4　川嶋裕毅　2011『千葉県四街道市嶋越遺跡（第2地点）　－物井2号線埋蔵文化財調査委託－』（財）印旛郡市文化財センター

第２章　遺構と遺物

第１節　概要

発掘調査は３期に分けて行われたが，その都度トレンチによる確認調査を実施し，遺構の有無，土層の状態などを確認した上で，本調査範囲を確定し，本調査に移行した。調査対象面積 14,592㎡に対し本調査面積は 7,560㎡であった。

調査対象範囲の中央部は台地上の平坦面にあたり，本来であれば最も多くの遺構が検出されるはずの立地であるが，近世以降，物井集落の住宅建設地となり，様々な造成工事で地盤も下げられたようで，竪穴住居跡は１軒も検出されなかった。造成工事をまぬがれた北側と南側の斜面部で合計 35 軒の住居跡が確認されたが，それらも壁上部を削られたものが多く，総じて遺存度は悪かった。本来は検出数の２倍前後の住居跡が営まれていたと考えて大きな誤りはないだろう。

竪穴住居跡 35 軒の内訳は縄文時代１軒，弥生時代２軒，古墳時代２軒，奈良･平安時代 30 軒である（第１表）。古墳時代以前の住居はすべて北東側斜面部にあり，縄文時代の１軒は斜面最上部に，弥生時代と古墳時代の住居跡は斜面中腹の発掘区の最北端部に検出された。

奈良・平安時代の住居跡も北東側斜面に 24 軒と多く所在し，南側斜面では６軒確認されたにすぎない。下総台地では南側斜面は急崖状を保ち，北側斜面は霜柱などで徐々に崩れ緩斜面を形成することが多い。鳩越遺跡のある台地も同様の様相を示しており，傾斜の緩い北東側斜面の方に，多くの竪穴住居が営まれることになったのであろう。南側斜面の６軒のうち３軒は斜面の最下部に位置する点が注目される。なお，各住居跡出土土器の観察所見については第２表に記載した。

竪穴住居跡以外の遺構は，南側斜面部の斜面上部から中腹にかけて，多くは地山整形に伴う形で検出された。３基の井戸以外の性格はほとんど不明だが，人骨の出土した SK-034 及び円形土坑である SK-018・019・052 の４基は近世の土葬墓の可能性が高いと考えられる。また，ほとんどの遺構は時期不明であるが，中世遺物は少なく，江戸時代後期の肥前や瀬戸・美濃産の陶磁器，在地の内耳土器などの破片を伴うものがあることから，遺構の時期は江戸時代後期主体と推測できる。

第２節　竪穴住居跡

１　古墳時代

SI-016（第 10 図，第１・２表，図版５）

位置　調査区北部，31S-76 グリッド付近に位置する。

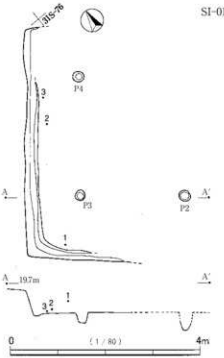
規模・形状　南東部分 2/3 程は，斜面に堆積した黒色土の地山に掘り込まれた壁及び床面部分が流失，または覆土との差異が不明確なため検出できなかったためか，西壁と南壁の一部のみの遺存である。他の多くの住居跡も同様な状況である。一辺 4.96 m，壁高 20㎝～ 51㎝である。主軸方向は N-40°-W である。

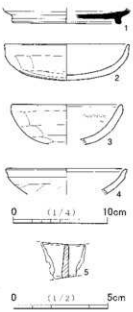
床面　硬化面は明確には確認できなかった。

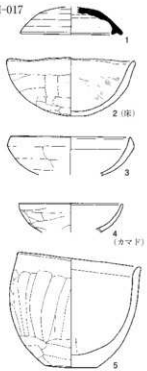
柱穴　３基検出された。径は 20㎝～ 25㎝，深さは 12㎝～ 27㎝と浅く，小規模なものである。

出土遺物　西壁付近に点在するが，図化できたのは４点のみである。１は瀬戸産須恵器の高台付き杯である。２～４は土師器の杯である。２・３は壁際の床面直上からの出土である。５は鉄製刀子の断片と思

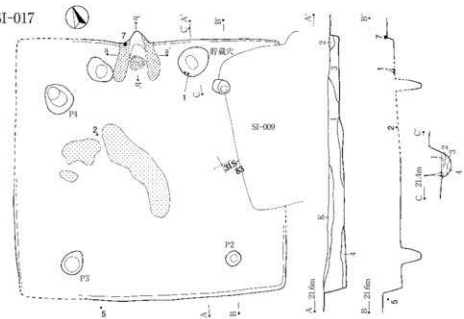
SI-016

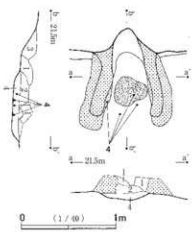






SI-017

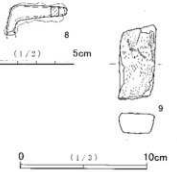




SI-017
1. 暗褐色土　山砂やや多，焼土粒少，褐色土粒少
2. 暗褐色土　山砂多，焼土ブロック少
3. 褐色土　山砂多，山砂ブロック多，焼土ブロック多
4. 暗褐色土　山砂少，焼土粒若干

貯蔵穴
1. 黒褐色土　黄褐色砂粒若干
2. 褐色土　黄褐色砂粒多
3. 褐色土　黄褐色砂粒多
4. 褐色土　黄褐色砂粒若干

カマド
1. 黄白色土　山砂層，構築体崩落
2. 暗褐色土　山砂多，焼土粒多，流込土
3. 暗褐色土　焼土ブロック多，山砂ブロック多，流込土
4. 褐色土　焼土ブロック多，山砂多，流込土



第10図　SI-016・017及び出土遺物

われる。土器類の年代は7世紀後半に推定される。

SI-017（第10図，第1・2表，図版3・16・19）

位置　調査区北部西側，31S-83グリッド付近に位置する。奈良・平安時代住居跡SI-009に切られる。

規模・形状　南東壁に拡張したと考えられる痕跡が見られる。長軸5.5 m・短軸5.4 mの長方形で，床面積約20㎡，壁高24cm～53cmである。主軸方向はN-32.0°-Wである。

床面　平坦であるが硬化面は確認されない。西側に焼土が検出された。

柱穴　柱穴は4基が対角線上に検出された。深さは17cm～68cmである。他にカマド両側にピットが2か所検出された。深さは54cm・50cmと比較的深いものである。貯蔵穴の可能性が想定される。

カマド　北西寄りに位置する。袖は山砂を主体として構築される。カマド内覆土は袖の崩落による山砂と焼土ブロックを含む暗褐色土である。

覆土　暗褐色土が主体で山砂粒を多く含む。焼土ブロック・焼土粒も含む。

出土遺物　1は須恵器蓋である。カマドの東脇から出土した。2～4は土師器杯である。2は丸底で底部から内湾しながら立ち上がり口縁部でわずかに外反する。外面は横方向にヘラケズリを施し，内面はヘラミガキが施されている。3・4は小型の杯で外面にはヘラケズリが施される。器面の荒れが著しく，詳細は不明瞭である。4はカマド内からの出土である。5・6は小型の甕である。7の支脚はカマド袖の上部から出土した。土器類の年代は7世紀後半に推定される。8は直角に折れ曲がった鉄製品の断片で，鋏（かすがい）の可能性がある。9は砂岩製の砥石である。8・9は近世の遺物で，住居跡に伴うものではない。

2　奈良・平安時代

SI-008（第11図，第1・2表，図版3・19）

位置　調査区北部31S-87グリッド付近に位置する。

規模・形状　東側は，台地の縁付近にあることから，傾斜により流失または確認できずに失われている。南側は現代の道路が存在したため遺存しない。また，南側の一部床面をSI-018が切る。壁高は30cm～59cm，主軸方向はN-15.0°-Eである。

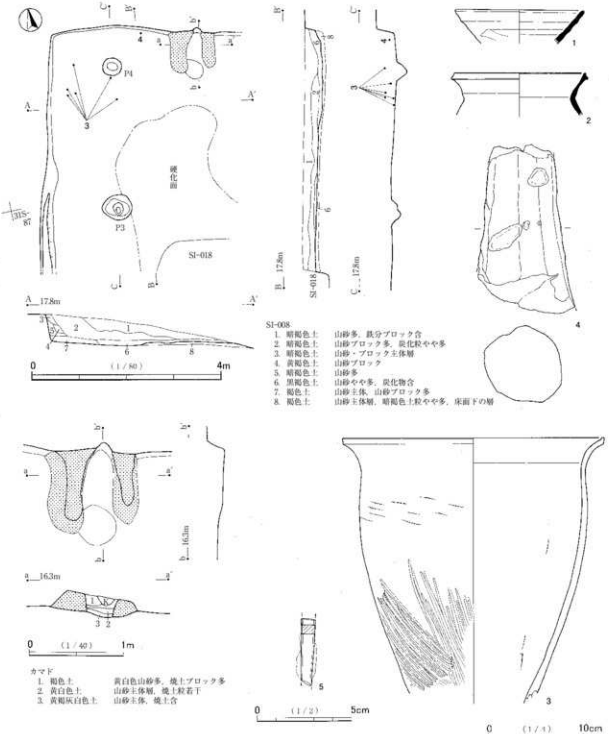
床面　住居中央部に硬化面が広がる。西壁の南側一部に壁溝が見られる。

柱穴　柱穴は2基確認された。対角線上に4本配置されたものと考えられる。深さは22cm～31cmである。

カマド　北壁の中央に位置する。袖は山砂を主体として構築される。径40cm程度の円形の火床面が検出された。

覆土　山砂層を掘り込んで構築された住居のため，覆土には山砂が多く含まれる。

出土遺物　出土量は少なく，北西コーナー付近に集中して出土した。1は新治産の須恵器杯である。2は小型の甕の口縁部の一部のみの遺存であり，東海産と思われる。3は常陸型の甑である。床面直上からの出土である。土器類の年代は9世紀後葉に推定される。4は土製支脚で，カマド西側の北壁近くの床面からやや浮いた状態で出土した。5は覆土の高い部位で出土した鉄製品で，鉄鏃の篦被部の破片ともみられるが，新しい時期の混入物の可能性もある。



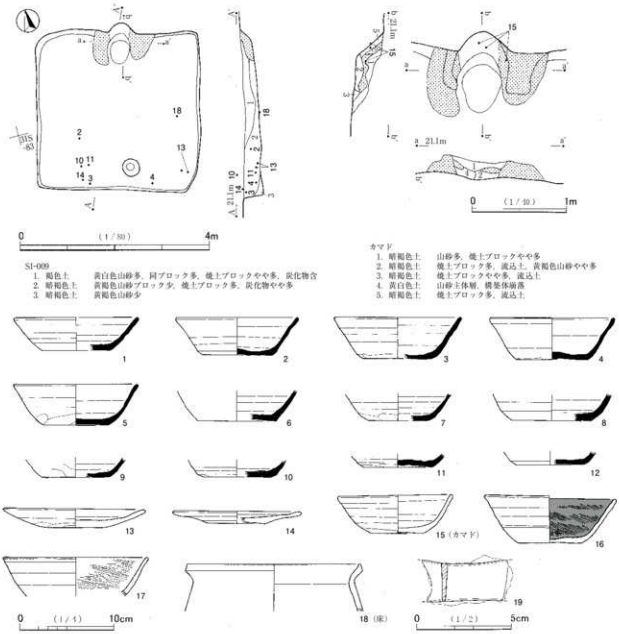
第 11 図　SI-008 及び出土遺物

SI-009（第 12 図，第 1 ・ 2 表，図版 3 ・ 15）

位置　調査区北部，31S-83 グリッド付近に位置する。

規模・形状　長軸 3.4 m・短軸 3.3 m の正方形で，床面積約 10.5㎡，壁高 12㎝～ 29㎝である。古墳時代竪穴住居跡 SI-017 を切る。主軸方向は N-16.5° -E である。

床面　若干南側が下がるもののほぼ平坦である。明確な硬化面は確認されなかった。



第 12 図　SI-009 及び出土遺物

ピット　柱穴は検出されず，南壁ほぼ中央付近に入口に伴うピットが確認された。径 36cm～ 41cm，深さ 37cmの円形である。

カマド　北壁中央に位置する。両袖の遺存は比較的良い。構築材は下層が粘土の比率の高い山砂，上層は山砂である。カマド内覆土は構築体崩落土を含む焼土ブロックが多い山砂である。

覆土　焼土ブロック・炭化物を含む暗褐色土を主体とする。焼土ブロックが多く含まれているものの，自然堆積とみられ，焼失住居の可能性は考えられない。

出土遺物　住居南側に散在し，多くが床面又は床面直上から出土した。図化はできなかったがカマド内から甕などの破片が出土している。1～12は須恵器の杯である。1～5・7・9～12は褐色系の須恵器で千葉産（現千葉市北東部の中原窯・宇津志野窯などで酸化炎焼成で生産されたもの），6・8は長石粒を多く含み現茨城県新治産とみられる。13・14はロクロ土師器の皿である。13は切り離しの後底部全面に手持ちヘラケズリを施し，14は回転ヘラケズリが施される。15～17は土師器の杯である。16は内面に黒色処理が施されている。18は土師器の小型の甕である。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。19は幅2.2cm前後，現存長4.5cmの細長い鉄板状品で，両端が欠損している。鉄板の側縁に明確な刃部は認められず，用途不明の遺物である。

SI-010（第13図，第1・2表，図版3・15）

位置　調査区北部中央，31T-05グリッド付近に位置する。

規模・形状　一辺3.5m程度のほぼ正方形で，床面積約11.0㎡，壁高7cm～51cmである。斜面にかかるため南側の壁が流失または検出できなかった。主軸方向はN-71.5°-Wである。

床面　硬化面は確認されなかった。

柱穴・ピット　主柱穴が対角線上に4基検出された。深さは25cm～36cmである。東側の壁にテラス状の段が見られるが，入口に伴うものと考えられる。

カマド　西壁中央に構築されている。奥壁は緩やかに立ち上がる。火床部は径30cm～40cmの円形で，若干硬化している。

覆土　暗褐色土が主体で，山砂ブロックや焼土ブロックをやや多く含んでいる。

出土遺物　遺物の出土量は少ない。住居の中央に散在する。図化できたのは8点である。1～3は新治産の須恵器杯である。4は非ロクロの土師器杯である。口唇部ぎりぎりまで横方向のヘラケズリが施され，底部ヘラケズリにより平底を形成している。5は新治産の須恵器甕である。6・7は常陸甕の口縁部，8は常陸甕の底部である。6と8は同一個体の可能性がある。土器類の年代は8世紀後葉に推定される。

SI-011（第14図，第1・2表，図版4・15）

位置　調査区北部31T-17グリッド付近に位置する。SI-012を切る。

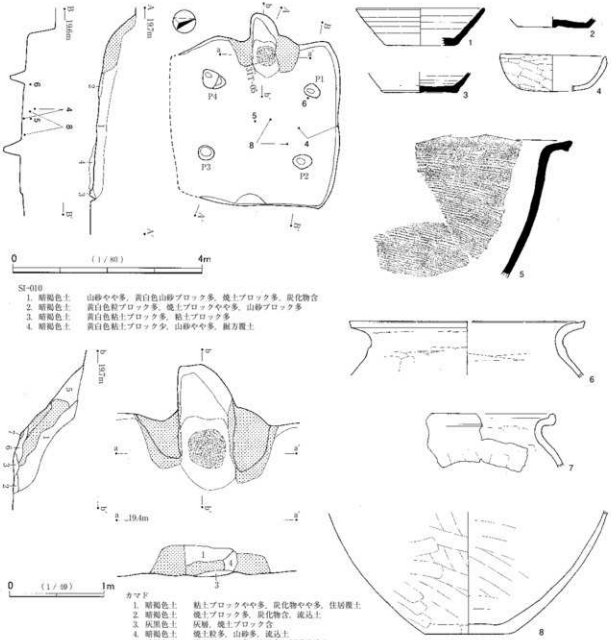
規模・形状　一辺約3.7mの正方形で，床面積は12.2㎡である。東側が斜面にかかるため，壁高は浅い位置で11cm，最深で68cmと差が大きい。主軸方向はN-89.0°-Wである。

床面　硬化面は確認されないがほぼ平坦である。

柱穴　対角線上に4基検出された。深さは24cm～46cmである。カマドの対面壁ほぼ中央付近に入口に伴うピットが検出された。径18cm×12cmの円形である。深さは16cmと浅い。

カマド　袖部は山砂を主体に構築されている。被熱により赤変しており，袖部の遺存は悪い。火床部は奥まで広く広がる。

出土遺物　出土量は少なく，住居全体に散在する。1は千葉産の須恵器杯で，ヘラ切りの後全面回転ヘラケズリを施している。2・3は土師器杯である。4は新治産の甕で縦方向の平行タタキが施されている。カマド右脇の床面から出土している。6は口縁部付近のみの遺存であるが，武蔵型の甕である。土器類の年代は8世紀後葉に推定される。



第 13 図　SI-010 及び出土遺物

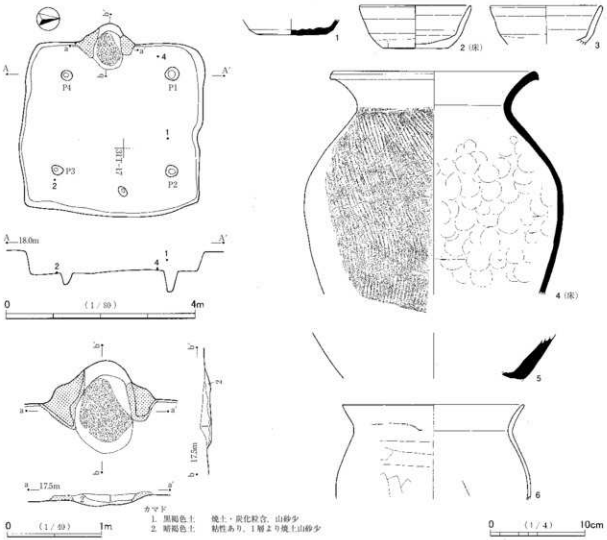
SI-012（第 15 図，第 1・2 表，図版 4）

位置　調査区北部，31T-27 グリッド付近に位置する。SI-011 に切られる。

規模・形状　長軸 5.3 m・短軸 5.0 m のほぼ正方形で，床面積約 25.1㎡，壁高 11.7cm～ 64.6cmである。南東側の壁は攪乱で削平されている。主軸方向は N-66.0° -W である。

床面　硬化面は確認されていない。

柱穴　対角線上に 4 基検出された。深さは 27cm～ 50cmで，比較的深いものが多い。



第14図　SI-011及び出土遺物

カマド　北西壁の中央に位置する。袖の構築材は山砂が主体である。カマド内堆積は黒色土主体で焼土を含む。

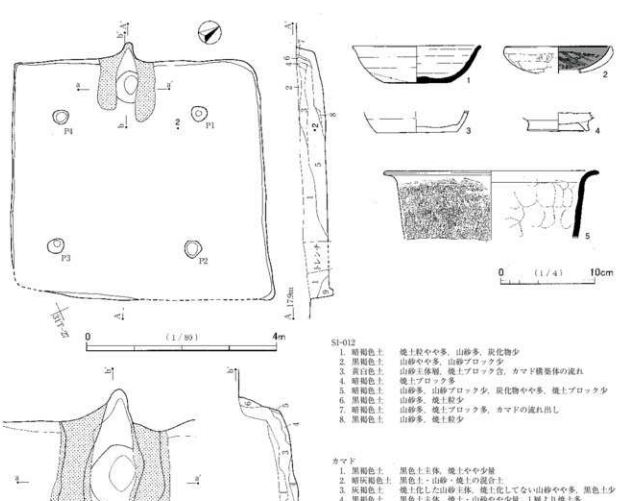
覆土　黒褐色土が主体で山砂粒を含んでいる。

出土遺物　出土遺物は少量である。図化できたのは5点である。カマド内からも出土したが，床面から浮いた状態の破片のみである。1は千葉産の須恵器杯である。ヘラ切りの後，底部全面に手持ちのヘラケズリを施している。2は非ロクロの土師器杯で，内面黒色処理が施されている。古墳時代7世紀代の土師器で流れ込みとみられる。3はロクロ土師器で底部は切り離しの後，全面回転ヘラケズリを施している。4は土師器の高台付き杯である。5は千葉産の甕又は甑である。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。

SI-013（第16図，第1・2表，図版4・15・18）

位置　調査区北側中央，31T-24グリッド付近に位置する。

規模・形状　長軸4.1 m・短軸3.5 mのやや横方向に長い長方形で，床面積は11.1㎡，壁高5 cm～26cmである。主軸方向はN-46.5°-Wである。



第 15 図　SI-012 及び出土遺物

床面　ほぼ平坦であるが，硬化面は確認できなかった。

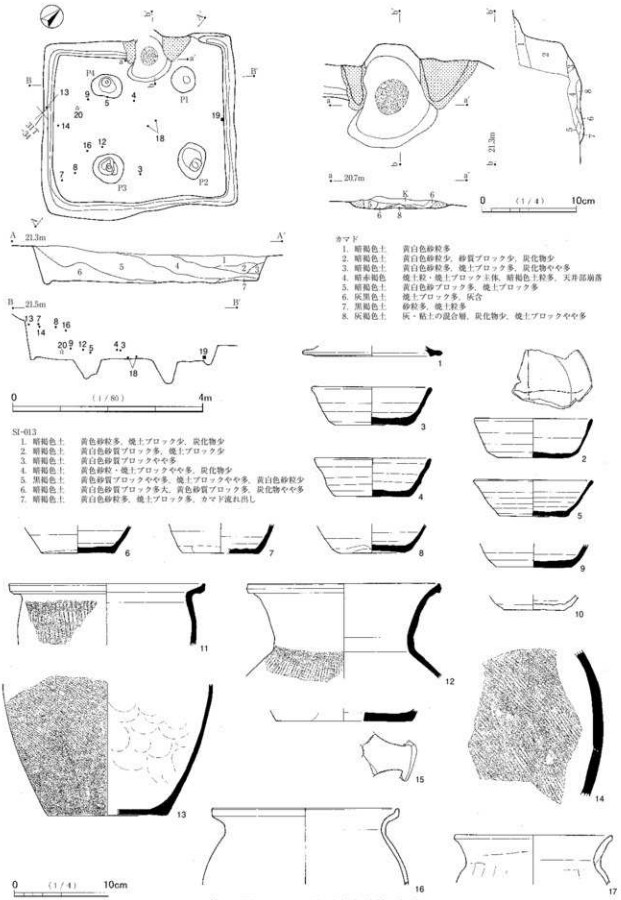
柱穴　対角線上に 4 基検出された。径は比較的大きく 60cm前後を測り，深さも 39cm～ 59cmと深い。

壁溝　壁溝が検出される住居の少ない中，全周する溝が検出された。幅は 15cm，深さは 13cmである。

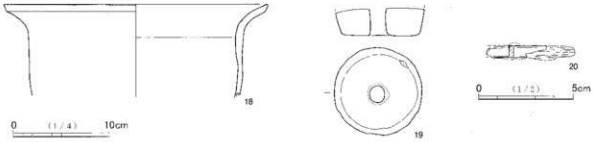
カマド　北西壁のほぼ中央に位置する。両袖は遺存するものの残存状況は悪い。構築材は山砂を主体とし，火床部は焼土や炭化物などを含んでいる。

覆土　暗褐色土主体である。南西壁方向からの流入で，自然堆積と思われる。

出土遺物　出土位置は上層から中層にかけてで，周囲からの流入か廃棄されたものと考えられる。1 は新治産須恵器の蓋である。口唇部のごく一部のみの遺存であるため詳細は不明である。2 ～ 9 は須恵器の杯である。2 の内面には，底部から体部下半にかけて焼成後に刻された十字状に交差する沈線が認められる。沈線は地肌が黒色に発色した部位をなぞるように引かれている。この黒色部は火だすきのように線状



第16図　SI-013 及び出土遺物（1）



第17図　SI-013及び出土遺物（2）

に続き，外面の対応する部位にも認められる。3・11・13・15は千葉産の須恵器であるが，11は他の土器類より新しい様相であり，流れ込みとみられる。16は常陸型の甕，17は在地産の甕とみられる。18は在地の甕または甑で，床面からの出土である。土器類の年代は8世紀中葉に推定される。19は土製紡錘車で，北西壁溝近くの床面直上から検出された。上面が欠損したためか，全面的に磨かれ平滑に再調整されている。20は鉄製刀子の茎部の破片で，木質が遺存する。

SI-014（第18図，第1・2表，図版4・5・15）

位置　調査区北部中央，31T-26グリッド付近に位置する。

規模・形状　東側は撹乱や斜面による流失または検出できなかったか，床面まで失われていた。壁高9cm～40cm，主軸方向N-54.5°-Wである。

柱穴　柱穴は2か所で検出された。深さは30cm程度で比較的浅い。

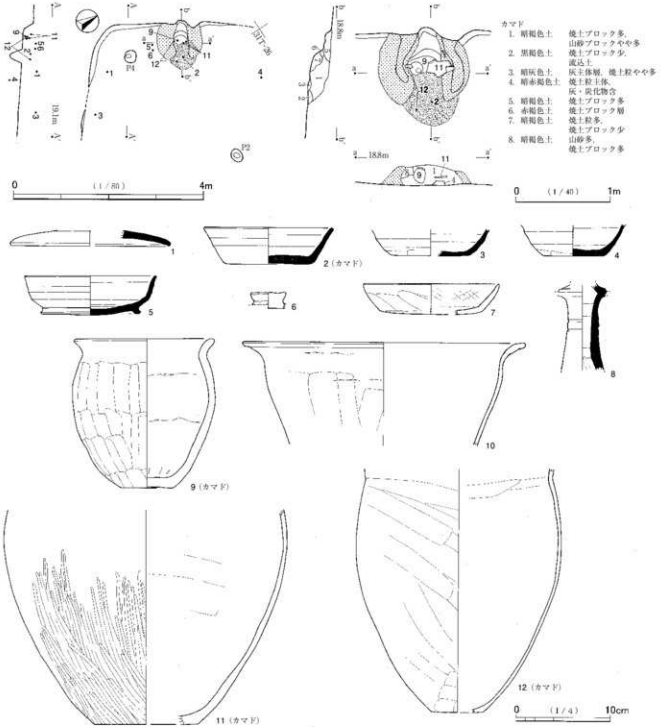
カマド　北西壁に位置する。おそらく壁のほぼ中央と考えられる。壁からの突出は小さい。袖の構築材は山砂が主体である。カマド内覆土は焼土ブロックを多く含んでいる。火床部は袖部前面に大きく広がっている。

出土遺物　遺物出土量は多い。図化できたのは12点である。カマド内からも複数点出土した。1は新治産の須恵器蓋の破片であるが，盤の可能性も考えられる。2は新治産の須恵器杯で，カマド内からの出土である。3・4は千葉産の須恵器杯，5は高台付きの須恵器杯で湖西産と思われる。7は上総型の杯で内面に斜格子状の暗文が施されている。8は灰釉浄瓶の頸部のみの遺存である。9は小型甕の完形品である。カマド内から倒位の状態で出土した。10は土師器の甕又は甑である。南側の壁に隣接する位置で3と接近して出土した。出土層位は上層である。11は常陸型の甕である。12は武蔵型の甕で，カマド内からの出土である。土器類の年代は8世紀前葉に推定される。なお，上総型杯（7）は下総国内での出土例は少なく，浄瓶（8）とともに特筆されるものである（「第3章 まとめ」 で後述）。

SI-015（第19図，第1・2表，図版5・16）

位置　調査区北端，31S-45グリッド付近に位置する。

規模・形状　西壁は調査区外にかかり，東側は傾斜面のための流失または検出できなかった。南壁は3.9mであるが，おそらくほぼ正方形に近い形状と推測される。壁高15cm～33cm，主軸方向はN-29.0°-Wである。

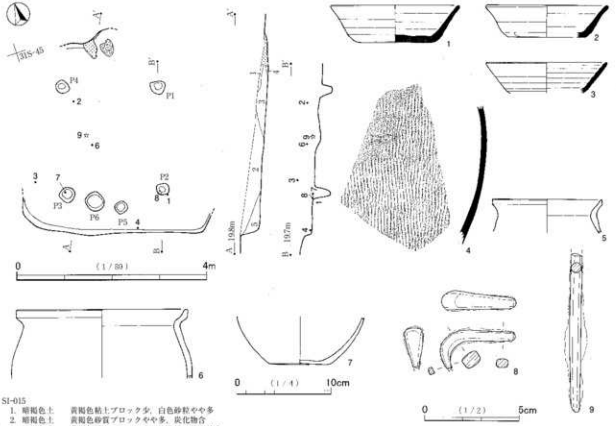


第 18 図　SI-014 及び出土遺物

床面　硬化面は確認できなかった。中央部分に凸凹が確認できる。

柱穴・ピット　柱穴は対角線上に4基確認され，南側の柱穴間に2か所ピットが検出された。中央のものは入口に伴うものと考えられる。

カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。遺存状態は悪く，左袖のみ残り，右袖は欠損する。構築材は山砂主体である。カマド内覆土の下層は灰及び炭化粒・焼土を主体とした灰黒色土，上層はカマド内壁の



第19図　SI-015及び出土遺物

崩落が考えられる赤褐色土で構成される。

覆土　暗褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物　遺物は比較的全体に散在する。図化できたのは9点である。1・2は新治産の須恵器杯である。4は須恵器大型甕の胴部破片，5は在地の小型甕の口縁部，6は常陸型の甕の口縁部付近，7は器壁の薄い小型甕の胴中位以下の破片である。土器類の年代は8世紀後葉に推定される。8は釣針状のカーブをもつ鉄製品，9は断面円形の鉄製棒状品で，ともに用途不明である。

SI-018（第20図，第1・2表，図版5）

位置　調査区北側，31S-87グリッド付近に位置する。SI-008を切る。

規模・形状　東側は撹乱などのため確認できなかった。西壁は1辺3.5 m，壁高16cm～21cmである。主軸方向はN-12.5°-Wである。

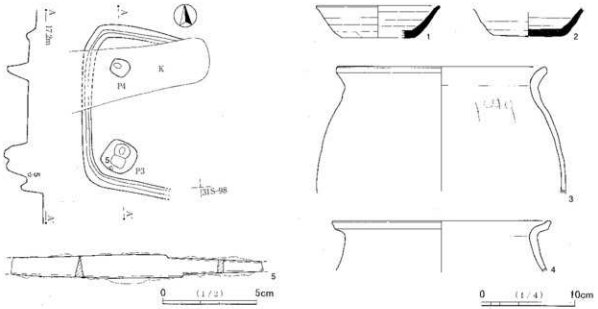
床面　硬化面は確認されなかったが，ほぼ平坦である。

柱穴　2か所で検出された。P3はP4に比べ規模が大きい。東側の柱穴が確認できないため詳細は不明である。

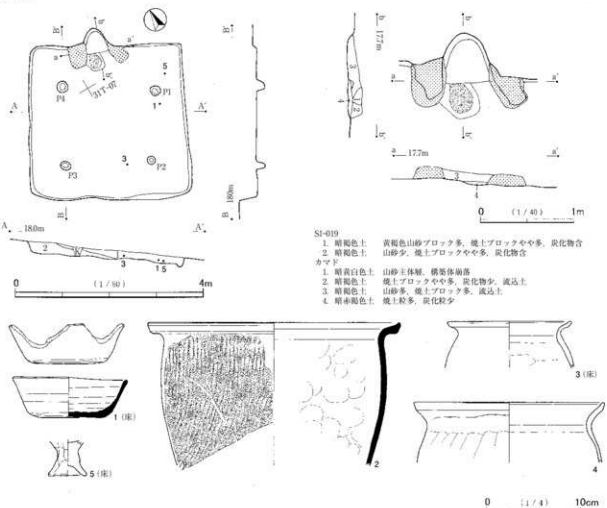
壁溝　壁の確認できた箇所では全体に検出された。幅16.0cm・深さ7.0cm程度である。

出土遺物　出土量は少なく南側に散在する。図化できたものは5点である。1・2は新治産の須恵器杯，3・4は常陸型の甕である。土器類の年代は8世紀末～9世紀初頭に推定される。5は鉄製の刀子で，身

SI-018



SI-019



SI-019
1. 暗褐色土　黄褐色山砂ブロック多，焼土ブロックやや多，炭化物含
2. 暗褐色土　山砂少，焼土ブロックやや多，炭化物含
カマド
1. 明黄白色土　山砂主体層，構築体崩落
2. 暗褐色土　焼土ブロックやや多，炭化物少，流込土
3. 暗褐色土　山砂多，焼土ブロック多，流込土
4. 暗赤褐色土　焼土粒多，炭化粒少

第20図　SI-018・019及び出土遺物

の先端と茎の端部が欠けている。現存長13.4cm，身部の現存長は7.2cmである。背と刃の両側に関が作り出される。身幅は最大1.5cmである。

SI-019（第20図，第1・2表，図版5・16）

位置　調査区北部，31T-07グリッド付近に位置する。

規模・形状　長軸4.2 m・短軸3.1 mの長方形で，床面積10.3㎡，壁高6㎝～17cmである。主軸方向はN-28.5°-Eである。

床面　明確な硬化面は確認できなかった。

柱穴　対角線上に4基検出された。17cm程度の深さで径も20cm程の小規模なものである。

カマド　北壁中央に位置する。両袖は遺存するが，特に右袖はかなり流失していると考えられる。構築材は山砂が主体である。焼土硬化面が検出されているが，カマドの奥の部分には確認されなかった。

覆土　山砂ブロック，焼土ブロックを含む暗褐色土が主体である。

出土遺物　遺物量は少なく散在する。床面又は直上からの出土が多い。1は千葉産の須恵器杯である。側面図に示すとおり2か所に欠損部があり，人為的なものである可能性がある。しかし出土状況からは祭祀に関連するかどうかは判断できない。2は千葉産須恵器の甕又は甑である。3・4は在地産の土師器甕である。5は高杯状ミニチュア土器の脚部である。土器類の年代は8世紀末～9世紀初頭に推定される。

SI-020（第21図，第1・2表，図版6・16・18）

位置　調査区北部中央，31T-03グリッド付近に位置する。

規模・形状　長軸3.6 m・短軸3.4 mのほぼ正方形であるが，南東側は攪乱等により消失している。床面積は約10.6㎡，壁高2㎝～45cmである。主軸方向はN-91.0°-Wである。

床面　明確な硬化面の確認はできなかった。

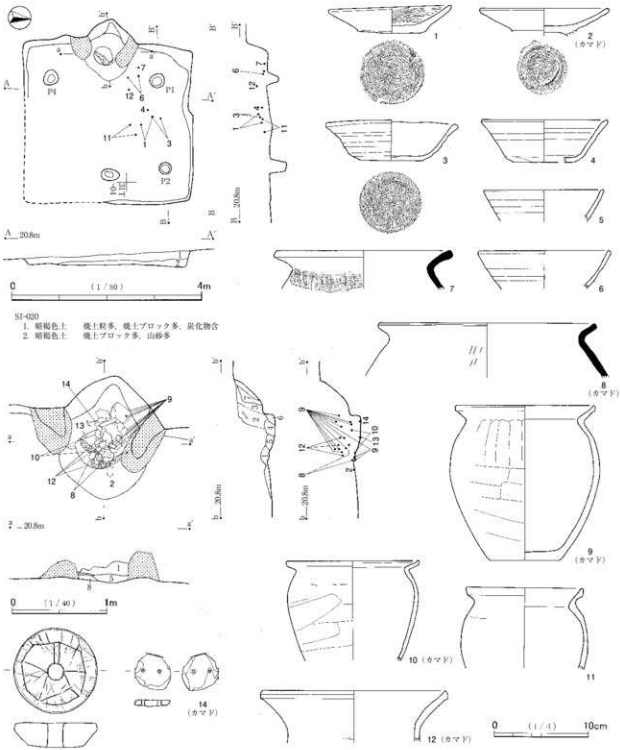
柱穴・ピット　柱穴は3基検出された。おそらく消失部分にも1基存在したものと推測される。深さは25cm～33cmである。カマド対面側の壁際中央部にピットが確認できた。径は長軸38cm・短軸24cmの楕円形，深さは14cmである。入口に伴うピットと考えられる。

カマド　西壁中央に構築されている。両袖が遺存し，構築材は山砂が主体である。遺物が多量に出土したためカマド内の土層の確認は困難であった。

覆土　暗褐色土が主体で，焼土ブロックなどを含んでいる。

出土遺物　1・2は土師器の高台付き皿である。1は高台部分が欠落したものをそのまま使用したものと考えられる。底部は平滑になり高台部の痕跡はほとんどないものの，底部付近の調整などを観察すると二次的利用が考えられる。3～6は土師器杯である。7・8は須恵器の甕の口縁部片である。9～12は土師器の甕である。9～11はロクロ成形の可能性，12は台付甕の高台部分の可能性が考えられる。土器類の年代は9世紀後葉に推定される。

13は石製紡錘車である。緑色味を帯びた黒色の蛇紋岩製で，研磨されて光沢をもつ。上面に線刻によって不整な八角形が描かれ，軸孔から5つの角へ直線が引かれる。うち1方向のみ2重線が引かれている。14は滑石製の双孔円盤で，周囲が全面的に欠損しているが，意図的に打ち欠いて小さくしているように見える。15は鉄製刀子の関付近の断片である。2・8～10，12～14はカマド内からの出土である。特



第 21 図　SI-020 及び出土遺物

に台付き皿（2），紡錘車（13）や有孔円盤（14）は底面からの出土であることから，カマド祭祀に関連するものと考えられる。

SI-021（第22図，第1・2表，図版6・16）

位置　調査区北部東端，31T-18グリッド付近に位置する。

規模・形状　長軸3.3 m・短軸3.2 mのほぼ正方形であるが，北東隅部分は調査区境のため不明である。床面積8.5㎡，壁高21㎝～53㎝である。主軸方向はN-19.5°-Eである。

床面　ほぼ平坦であるが，硬化面は確認できなかった。

柱穴　柱穴やその他のピットなどは検出されなかった。

カマド　北東コーナーに位置する。煙道もコーナー方向に向いて突出する。両袖が遺存するが右袖の遺存度が悪い。構築材は山砂主体である。

覆土　暗褐色土が主体で，山砂ブロックを含んでいる。

出土遺物　出土量は少ない。カマド内からも一括で出土したが，図化できたのは10点である。1は須恵器蓋である。2～5は新治産の須恵器杯，6は湖西産の須恵器高台付き杯である。7は胴部外面に横方向のタタキ目の施された須恵器甕である。8は在地産の土師器甕である。土器類の年代は8世紀中葉に推定される。9は中空の筒状品で，焼成後に強く火を受けており，外面は灰白色に，内面は桃色に変色している。輪の羽口の可能性もあるが，羽口にしては小さく，また図の下端から外方に広がる形態だったとみられるので，古墳時代中期～後期の高杯の脚部破片の可能性が考えられる。強く火を受けているので，何らかの送風装置に転用されたものであろう。10は盤状の杯1/5周ほどの破片で，体部外面は横方向に細かくヘラケズリ，内面は全体に丹念なナデ，底部外面は位置方向にヘラケズリされる。内外面とも赤彩される。11は鉄製刀子で，身の先端と茎の末端を欠く。現存長13.0㎝，身幅は関の部分で1.4㎝である。出土層位は2の杯を除き，覆土の中層から上層の出土で，周囲からの廃棄又は後の流れ込みと考えられる。

SI-022（第23図，第1・2表，図版6・7・17）

位置　調査区北部東端，31T-28グリッド付近に位置する。

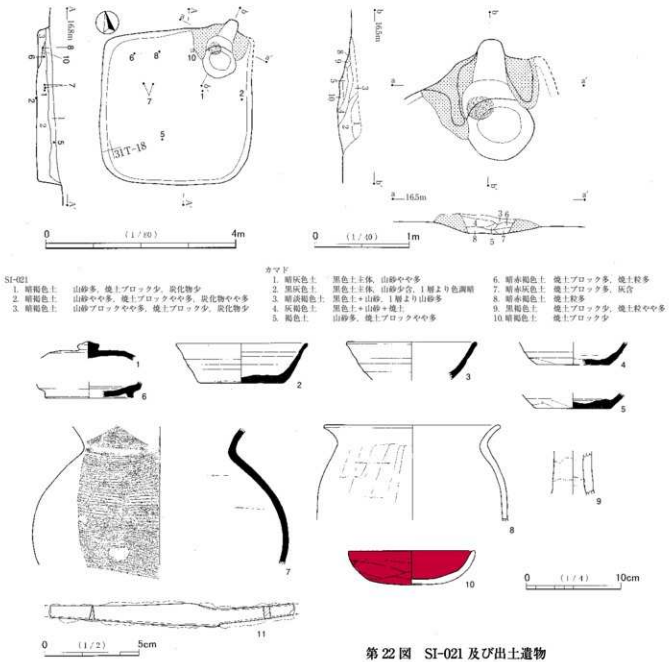
規模・形状　住居東部は傾斜面のため流失，または検出できなかった。遺存部分の西側は一辺3.3 m，壁高は11㎝～13㎝である。主軸方向はN-20.5°-Wである。

床面　硬化面は確認されなかった。

柱穴　柱穴やその他のピットの検出はない。

カマド　北壁に構築されている。おそらくほぼ中央に位置するものと考えられる。袖の構築材は山砂が主体で，内側が赤変している。

出土遺物　出土量は少量であるが，カマドの右側の床面から1の須恵器の盤と3の甕が検出された。1は口縁部の1/6周（9.5㎝）ほどが4回に分けて意図的に打ち欠かれているものと考えられる。カマドの左袖に立てかけられた状態で出土した。3の甕もその傍からの出土であり，底部が欠損している。これも故意に割られた可能性もある。カマド祭祀に関連した2点と考えられる。2は須恵器杯の微細な破片である。土器類の年代は8世紀中葉に推測される。



第22図　SI-021 及び出土遺物

SI-023（第23図，第1・2表，図版7）

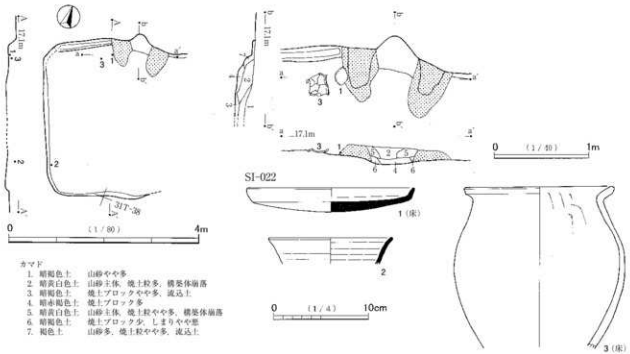
位置　調査区北部東側，31T-27 グリッド付近に位置する。

規模・形状　東側は傾斜面などのため検出できなかった。カマドの位置する西側壁の一部のみの遺存であるため詳細は不明である。壁高は15cm～21cmである。

カマド　両袖が遺存する。構築材は山砂が主体である。火床面が内部に確認できた。

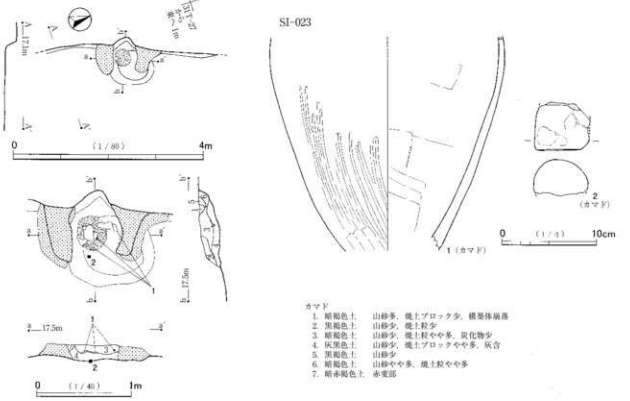
出土遺物　カマド内から甕と支脚が出土した。1の土師器甕は常陸型甕の胴部である。カマド内覆土の中層から検出された。2の支脚は底面からの検出である。両遺物ともに遺存状態が悪いことから，カマド祭祀に関連するものか否かは不明である。

SI-022



カマド
1. 暗褐色土　山砂やや多
2. 暗黄白色土　山砂主体，焼土粒多，構築体崩落
3. 暗褐色土　焼土ブロックやや多，流込土
4. 暗赤褐色土　焼土ブロック多
5. 暗黄白色土　山砂主体，焼土粒やや多，構築体崩落
6. 暗褐色土　焼土ブロック少，しまりやや悪
7. 褐色土　山砂多，焼土粒やや多，流込土

SI-023



カマド
1. 暗褐色土　山砂多，焼土ブロック多，構築体崩落
2. 黒褐色土　山砂少，焼土粒少
3. 暗褐色土　山砂少，焼土粒やや多，炭化物少
4. 灰黒色土　山砂少，焼土ブロックやや多，灰含
5. 黒褐色土　山砂少
6. 暗褐色土　山砂やや多，焼土粒やや多
7. 暗赤褐色土　赤変部

第23図　SI-022・023及び出土遺物

SI-024（第24図，第1・2表，図版7・17）

位置　調査区北部東側，31T-37グリッド付近に位置する。

規模・形状　東側は傾斜による流失または検出できず，詳細は不明である。壁高は8㎝～38㎝，主軸方向はN-61.0°-Wである。

柱穴　ピットは検出されなかった。

カマド　北西壁に位置する。両袖とも遺存し，構築材は山砂が主体である。

出土遺物　カマド内とその周辺から出土した。1は須恵器杯，2～4は土師器杯，5は須恵器小型壺である。6は格子状のタタキ目が残る甕である。7は新治産須恵器甕である。8は土師器の小型甕で在地産と思われる。8の甕に被せるように倒位で2・3の杯が出土した。5の須恵器小型壺も同様の位置で出土している。これらはカマド祭祀に関連する遺物と考えられる。土器類の年代は10世紀前葉に推定される。

SI-025（第24図，第1・2表，図版7）

位置　調査区北部南東側，31T-47グリッド付近に位置する。

規模・形状　残るのは西側の一部で，東側は傾斜面による流失または検出できなかった部分である。主軸方向はN-49°-Wである。

柱穴　3基検出された。深さは6㎝～38㎝である。

カマド　南西コーナー付近に位置する。煙道の突出は小規模である。袖の構築材は山砂が主体である。

出土遺物　カマド前の柱穴付近から出土している。図化できたのは7点である。1は千葉産の須恵器杯，2は新治産須恵器杯である。3は千葉産の須恵器甕または甑で，縦方向の平行タタキが施されている。4は小型の在地産土師器甕である。5は常陸型甕の口縁部のみの破片である。6・7は須恵器甕の底部片である。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。

SI-027（第25図，第1・2表，図版7・8・17）

位置　調査区中央東側，31U-34グリッド付近に位置する。

規模・形状　北方向は攪乱等により確認できず，東壁の一部は木の根による攪乱で消失している。南壁は一辺2.9ｍ，壁高は23㎝～38㎝，主軸方向はN-71.5°-Wである。

床面　硬化面は確認されなかった。

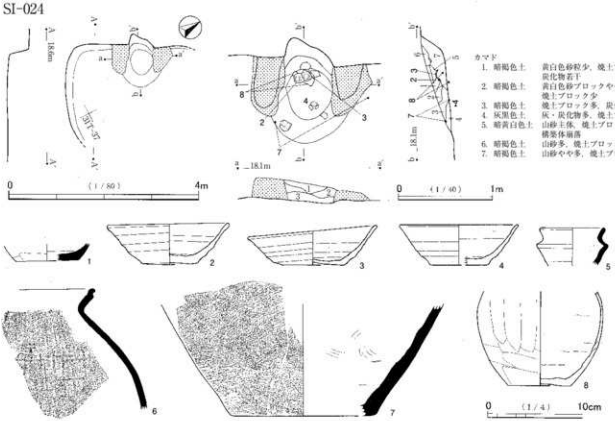
柱穴　柱穴やその他のピットは検出されなかった。

カマド　西壁に構築されている。煙道部が壁外へ長く突出している。両袖は遺存するが，全体の遺存状況は不良である。構築材は山砂が主体で粘土を含んでいる。カマド内部に煙道部などの崩落による流れ込み土層が確認できた。カマド奥は深く窪んでいる。その上面には焼土ブロックが確認でき，天井の崩落又は支脚代わりの粘土である可能性も考えられる。

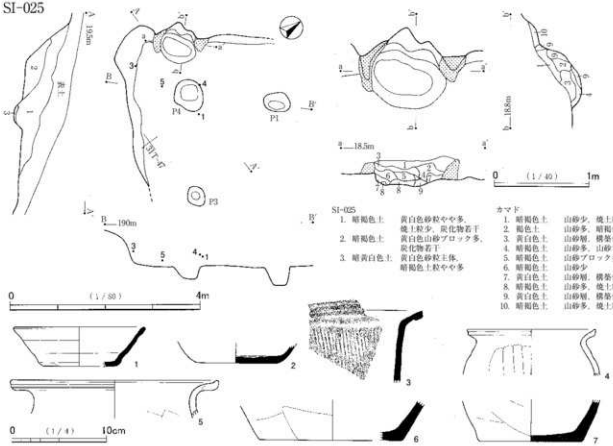
覆土　暗褐色土が主体で焼土ブロックを含んでいる。自然堆積と考えられる。

出土遺物　住居内に散在し，カマド内からも出土した。1～3は土師器杯である。5～7は在地の土師器甕である。8・9は甑の底部片である。8の内面には焼成後に加えられた沈線が見られるが，土器が破砕した後に偶然に付いた傷と考えられる。9の外面には，横線の上に縦二本線を交差させた焼成前の線刻が見られる。1・2・5・6はカマド内からの出土である。1は破損していたものの完形である。6は

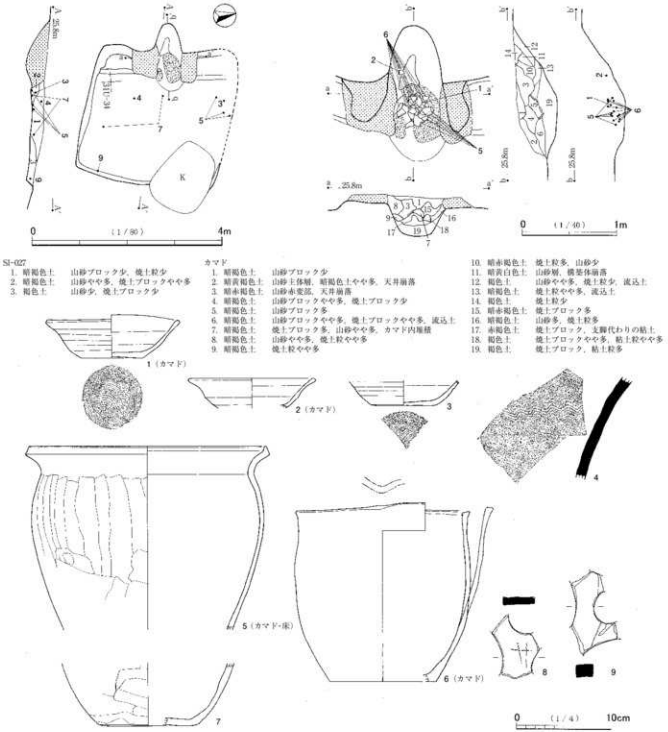
SI-024



SI-025



第24図　SI-024・025及び出土遺物

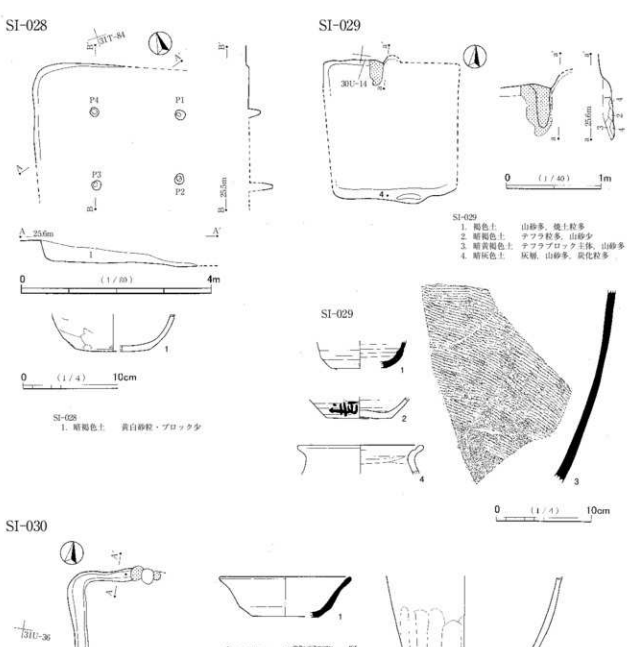


第 25 図　SI-027 及び出土遺物

2/3 ほどの遺存であるが，口縁部の一部が片口状に成形されている甕である。カマド祭祀に関係する遺物である可能性もあるが断定はできない。土器類の年代は 9 世紀後葉に推定される。

SI-028（第 26 図，第 1・2 表，図版 8）

位置　調査区中央部，31T-84 グリッド付近に位置する。



第 26 図　SI-028・029・030 及び出土遺物

規模・形状　壁は，確認トレンチによって北コーナー付近の一部のみ検出された。主軸方向はN-11.5°-Eで，その他詳細は不明である。

柱穴　対角線上に4基検出された。深さは浅いもので8㎝，深いもので32㎝である。

カマド　北壁の一部で赤変した山砂が確認されたことから，その付近にカマドが構築されていたと考え

られる。

出土遺物　遺存する北コーナー付近に散在して，若干の遺物が出土したものの，図化できたのは１点のみである。１は土師器小型甕の底部付近の破片である。

SI-029（第26図，第１・２表，図版８）

位置　調査区中央，31U-14グリッド付近に位置する。

規模・形状　確認トレンチにより一部滅失したため，詳細は不明瞭であるが，長軸約2.9 m・短軸約2.6 mである。カマドの対面の壁の中央部分がわずかに突出し，テラス状になる。入口施設に伴う整形の可能性が考えられる。

カマド　北壁に一部が検出された。右袖と煙道部の一部である。遺存状況は悪く，詳細は不明である。

出土遺物　図化できたのは４点である。１は新治産の須恵器蓋片である。２は土師器杯で，体部外面に横書きされた「导」字の墨書が残る。偏の部分が失われているが，「得」字の旁の部分とみてよいだろう。この字の右（上）に文字がないのは確実だが，左（下）側は欠損しており，別の文字があったかどうか不明である。ちなみに他遺跡の事例では「得加」「得合」「得上」のように，「得」字の下に文字が続く事例が知られている。３は入口付近から出土した須恵器甕の細片で，横方向のタタキ目が残る。４は土師器甕の口縁部片である。土器類の年代は９世紀中葉に推定される。

SI-030（第26図，第１・２表，図版８・17）

位置　調査区中央東側，31U-36グリッド付近に位置する。

規模・形状　西壁と北壁の一部のみの遺存である。東側は傾斜面のための土砂流失等により検出できなかった。西壁は一辺3.0 m，壁高は14cm～40cmである。主軸方向はN-9.8°-Wである。

カマド　北壁に薄く山砂と焼土が確認され，カマドの構築された位置は判明したが，詳細は不明である。

壁溝　残存する壁に沿って溝が検出された。幅32cm・深さ10cmである。

出土遺物　１は須恵器杯であるが，産地不明である。２は把手付きの須恵器甕又は甑で，縦方向の平行タタキが施されている。３は在地の土師器甕である。土器類の年代は９世紀中葉に推定される。

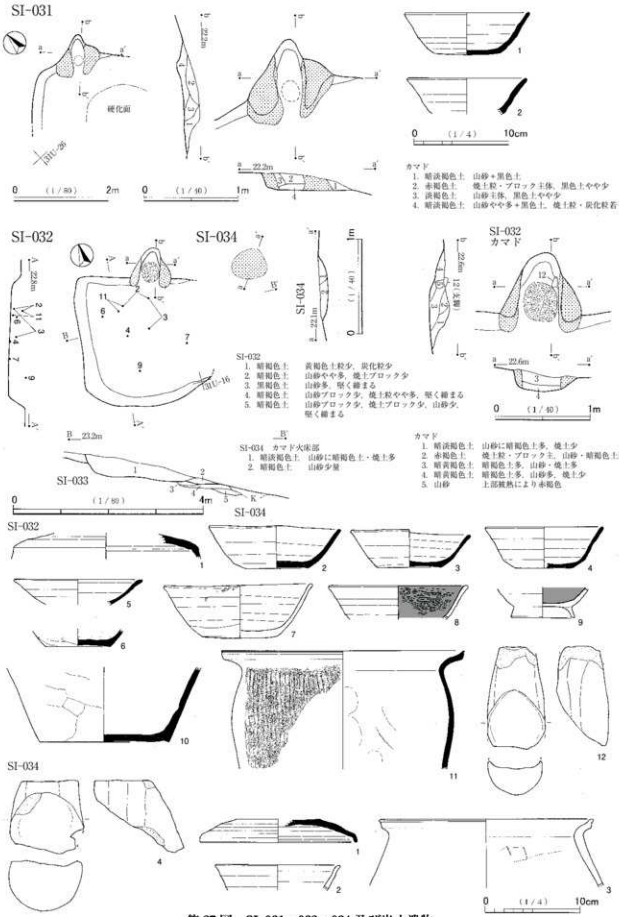
SI-031（第27図，第１・２表，図版８・17）

位置　調査区中央東端，31U-16グリッド付近に位置する。

規模・形状　東側は斜面部，西は木の根，南は攪乱等により削平され，北側のカマド付近のみの遺存である。主軸方向はN-49.5°-Eである。硬化面がカマド前面で確認できた。

カマド　北東コーナーに位置している。両袖が遺存するが右袖の残存状況が悪く，袖と火床部層の区別が難しい。火床部はやや硬化しているようではあるが判然としないため，破線で表した。赤変部は見られない。明瞭な掘り方や使用に伴う窪みは見られない。袖の構築材は山砂主体で焼土が混入する。

出土遺物　出土量は若干であり，図化できたのは須恵器杯の２点である。年代は９世紀後葉に推定される。



第 27 図　SI-031・032・034 及び出土遺物

SI-032（第27図，第1・2表，図版9・17・19）

位置　調査区中央，31U-06グリッド付近に位置する。

規模・形状　SI-033を切っており，東側は壁・床面や柱穴などが斜面部のため流失または検出できなかった。壁高は27㎝～35㎝である。

カマド　両袖が遺存し，構築材は山砂主体で，黒色土を若干含んでいる。左袖は内側と前面部がかなり流失しているようである。右袖の遺存も非常に悪い。火床部はやや硬化しているものの，赤変部は見られない。

出土遺物　出土量は少なく，散在する。1は須恵器の蓋である。2～6は須恵器杯，7・8は土師器坏，9は高台付き杯である。10・11は須恵器甕，12は支脚である。2・5の杯は床面から，3・4の杯は床面直上からの出土である。8・9の内面は黒色処理される。土器類の年代は9世紀中葉に推測される。支脚はカマド内奥からの出土である。支脚の下半部は斜めに削ぎ落とされ，切断面は磨かれて平滑で，横断面は図に見られるとおり凹レンズ状に湾曲している。同様に加工された支脚はSI-034でも出土しているが，加工の意図は不明である。

SI-033（第28図，第1・2表，図版9・17）

位置　調査区中央，31U-05グリッド付近に位置する。

規模・形状　長軸4.0ｍ・短軸3.5ｍのほぼ正方形で，床面積は11.6㎡，壁高は9㎝～28㎝である。北東隅付近は斜面部による壁崩壊等のため確認できなかった。主軸方向はN-61.0°-Wである。SI-032に切られる。

床面　中央部がわずかに硬化していたものの，図化できるほどではなかった。

柱穴　対角線上に4基確認できた。深さは14㎝～43㎝である。

カマド　北西壁中央に構築されている。両袖が遺存するものの，崩落などで袖の確認が困難であった。構築材は山砂が主体で，袖の内壁が崩れたことで焼土や黒色土が混入している部位もある。火床面は約半分程度が赤変していた。

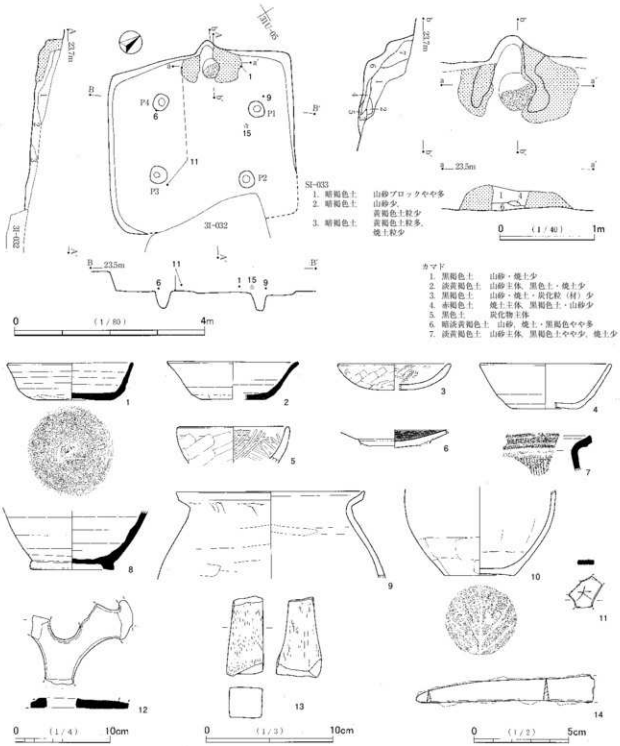
覆土　暗褐色土が主体で，黄褐色土粒が含まれる。自然堆積と考えられる。

出土遺物　1・2は須恵器杯である。1の底面には焼成前に施された「×」字状のヘラ書きが見られる。3・6は非ロクロの土師器坏である。4はロクロ土師器である。6は内面黒色処理された台付き杯である。8は東海産の壺の底部付近の破片である。9は常陸型甕の口縁部付近である。10の土師器甕の底部には木葉痕が見られる。11・12は多孔の甑の底部である。11の外面には焼成前にヘラ書きされた「大」字が残る。土器類の年代は，1・3・5が8世紀中葉であるが，2が9世紀中葉で後者が流れ込みとみられる。13は砥石である。14は鉄製刀子の身部で，現存長9.3㎝，身の最大幅は1.5㎝である。

SI-034（第27図，第1・2表，図版9・17）

位置　調査区中央，31U-06グリッド付近に位置する。SI-033の東側に位置するが，焼土を含む山砂が検出されたことで，カマドの位置がかろうじて確認できたにとどまる。

出土遺物　1は須恵器杯の蓋でツマミの部分が欠損している。2は土師器の杯であるが口縁部のごく一部のみの遺存である。3は常陸型甕の口縁部付近の破片である。土器類の年代は8世紀後葉に推定される。



第 28 図　SI-033 及び出土遺物

4 は土製支脚で，SI-032 出土のものと同様，斜めに削ぎ落とされ，切断面が磨かれている。本遺構出土のものは中央が窪まず，横断面は平坦である。

SI-035 A・B（第29図，第1・2表，図版9・17～18）

位置　調査区南側，29V-57グリッド付近に位置する。新旧2軒が切り合う。

規模・形状　古い住居跡（A）は東側の1/2程度のみの遺存であるため，規模や形状は不明瞭である。カマドの位置する北東壁は1辺3.4 mである。壁溝は南壁と北壁で確認でき，幅16cm・深さ6cm程，壁高は12cm～29cmである。主軸方向はN-58.0°-Eである。

新しい住居（B）は主軸方向をほぼ同じにして，旧住居跡内に構築されている。規模は北東壁で1辺2.3 m，壁高は11cm～12cmである。

床面　硬化面は確認できなかった。新しい住居跡内からは炭化材が多く出土した。出土遺物もほとんどがその周辺からの出土で，床面又は直上である。住居の廃棄とともに焼かれた可能性がある。

カマド　旧の住居跡は北東壁ほぼ中央に構築されている。袖はほとんど残らず遺存状態は悪い。煙道として機能していたと思われる掘り込みが残る。

出土遺物　1は須恵器の杯である。底部はヘラ切りの後に全面手持ちのヘラケズリが施されている。2・3・4は須恵器の甕，5は土師器甕で在地産である。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。

SI-036（第29図，第1・2表，図版9～10・18）

位置　調査区南部，30V-87グリッド付近に位置する。

規模・形状　南東側は斜面による流失または検出できなかった。カマドの構築されている北西壁は1辺2.25 m，壁高は22cm～47cmである。主軸方向はN-43.8°-Wである。

カマド　北西壁の中央に構築されている。右袖がわずかに残るが，遺存状態は非常に悪い。

出土遺物　1・2は土師器杯である。1は回転糸切りの後手持ちヘラケズリで調整されている。4は土師器の小型甕で胴部上位に最大径を有し，口縁部は短く「く」の字状に外反する。口唇部は上方に摘み上げられている。5は羽釜である。3・4とともにカマドの中から，胴部中位から底部にかけての部分が出土した。口縁部はカマドの前面から出土した。底面または底面直上からの出土であることから，故意に壊した後に廃棄したことが考えられる。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。

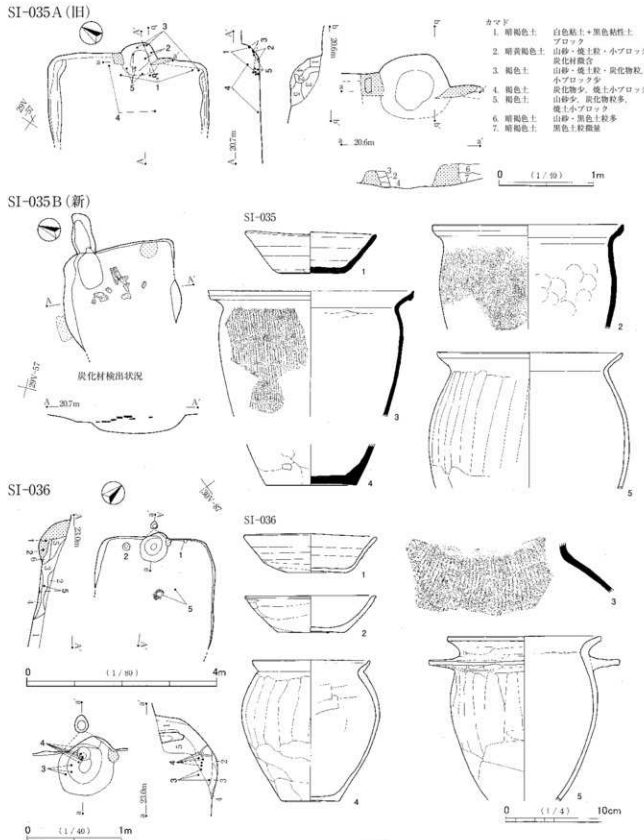
SI-037（第30・31図，第1・2表，図版10・18）

位置　調査区最南端，29W-10グリッド付近に位置する。

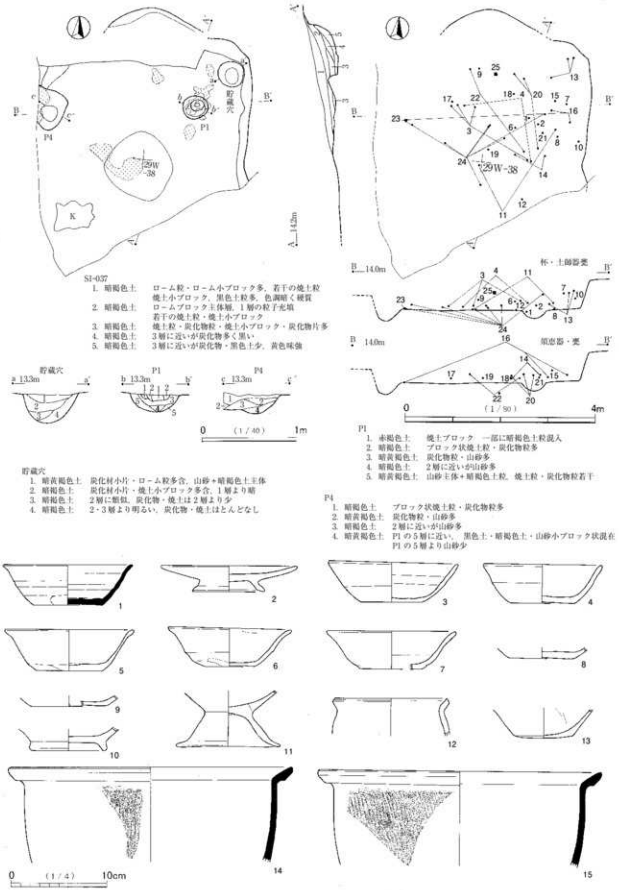
規模・形状　住居の南側が斜面にかかるため流失または検出できなかった。また，北側も攪乱等により壁を削平されていることから，規模など詳細は不明である。ピットは3か所確認されたが，東コーナーに位置する貯蔵穴とみられるピットの覆土からは炭化材の小破片が出土した。

覆土　自然堆積と思われるが，下層には焼土粒や炭化材が多く含まれていることから，焼失住居の可能性が考えられる。

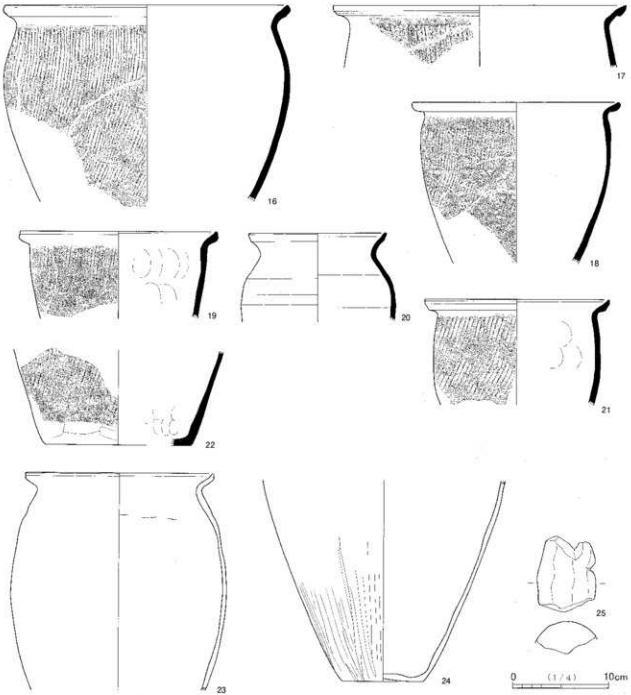
出土遺物　出土遺物量は多い。図化した遺物は25点である。1は千葉産とみられる須恵器杯，2は高台付き皿，3～9は土師器杯，10は土師器高台付き杯，11は高台付き椀，12・13は土師器小型甕である。14～22は須恵器甕又は甑，23・24は土師器甕である。1は底部ヘラ切りの後手持ちヘラケズリを施している。土器類の年代は9世紀中葉に推定される。25は土製支脚の破片である。



第29図　SI-035・036及び出土遺物



第30図　SI-037及び出土遺物（1）



第31図　SI-037及び出土遺物（2）

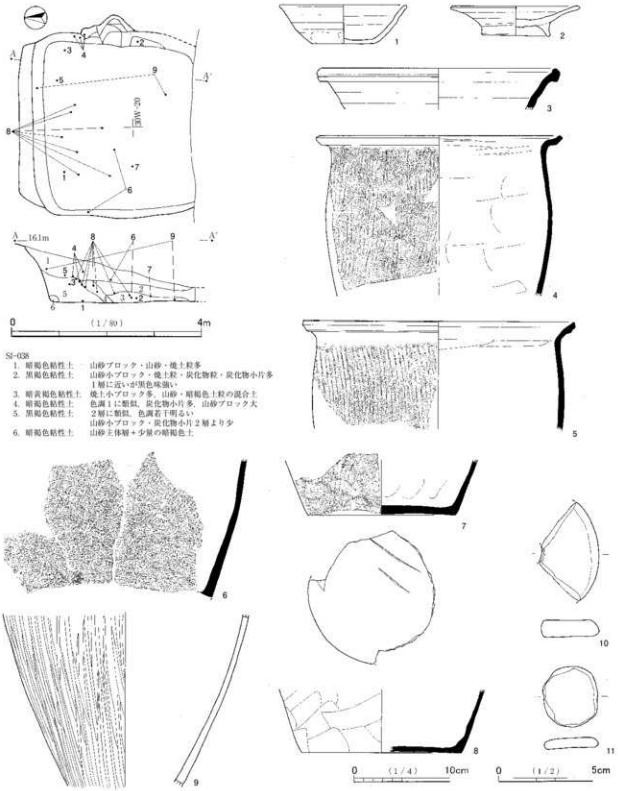
SI-038（第32図，第1・2表，図版10・18）

位置　調査区最南端，30W-10グリッド付近に位置する。

規模・形状　南側は斜面のための流失等により，壁が確認できなかった。長軸3.9 m・短軸約3.5 m，面積は10.6㎡程度，壁高は64cm～77cmである。主軸方向はN-91°-Eである。

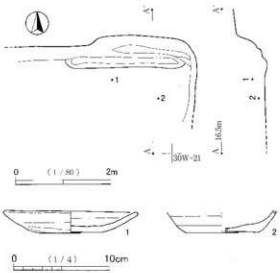
カマド　東壁のほぼ中央に位置する。煙道部は確認されたものの，袖部は遺存せず詳細は不明である。

覆土　山砂ブロックを含む暗褐色土が主体で，自然堆積の様相が確認できる。



第32図　SI-038及び出土遺物

出土遺物　1は土師器杯，2は土師器高台付き皿，3～7は須恵器甕で，7の底面には平行する2本の直線が焼成前に刻まれる。8は土師器の常陸型の甕である。土器類の年代は9世紀中葉に推定される。10は土師器杯の底部を加工した紡錘車で，周縁を磨き中央に穿孔を施す。11は土師器甕の胴部破片を加工



第33図　SI-039及び出土遺物

した円盤状製品で，用途は不明である。

SI-039（第33図，第1・2表，図版10・18）

位置　調査区最南端，30W-11グリッド付近に位置する。

規模・形状　北東コーナーの壁のみの遺存であるため，詳細は不明である。

出土遺物　1は土師器の皿，2は同じく杯である。年代は9世紀中葉に推定される。

第3節　その他の遺構と遺物

1　掘立柱建物跡

SB-001（第30図）

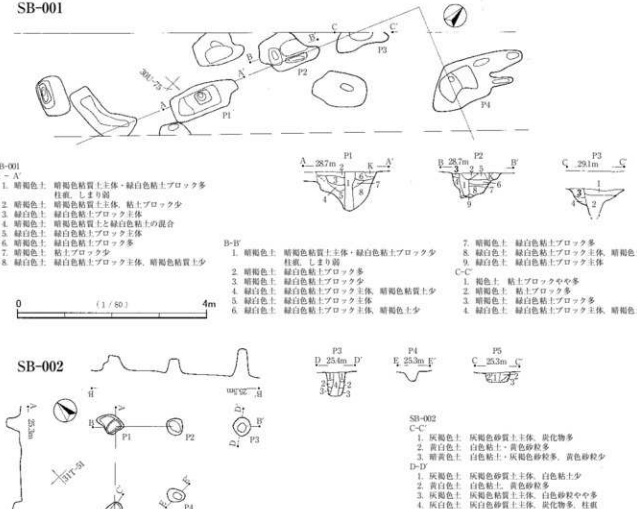
位置　調査区のほぼ中央，台地平坦部の30U-75グリッド付近に位置する。トレンチ調査によって確認された。

規模・形状　トレンチによる確認調査で，規模も形状も不規則なピット9基が確認された。覆土断面で柱痕跡が確認されたものがあり，掘立柱建物跡と判断された。P1～P3が南南西から北北東の方向にほぼ一直線で並び，直角に折れてP4に続いていたとみられる。P4は覆土断面では確認していないが，ピットの底の一段深い掘込みが柱痕跡と思われる。P1～P4の掘り方は長さ1m強，幅50cm前後の長方形プランを有し，深さは60cmである。柱の太さは径20cmほどで，柱周りの埋土には例外なく粘土ブロックが含まれていた。出土遺物はなく，遺構の時期は不明である。ほかに同程度の規模の土坑4基が確認されているが，建物の柱跡との確証はない。

SB-002（第30図，図版10）

位置　調査区北西部の31T-51グリッド付近，台地平坦部から傾斜部に移行するあたりに位置する。

規模・形状　径30cm～40cmの不整円形のピット5基が確認され，その配列状況及び柱痕が確認されたことから掘立柱建物跡と捉えられた。P1～P3は北西から南東方向をとり，P1～P5はこれに直交する。確認されたのは2間×1間分で，南西側は後世の土地境界の急斜面にかかるため不明である。深さは30cm～60cm，柱痕跡の太さは20cm～40cmほどである。埋土には粘土が混じる。出土遺物はなく時期は不明である。



第34図　その他の遺構（1）

2　調査区北半部の遺構（第7図）

SK-001（第35図，図版11）

位置　調査区北端部，31S-85グリッド付近に位置する。

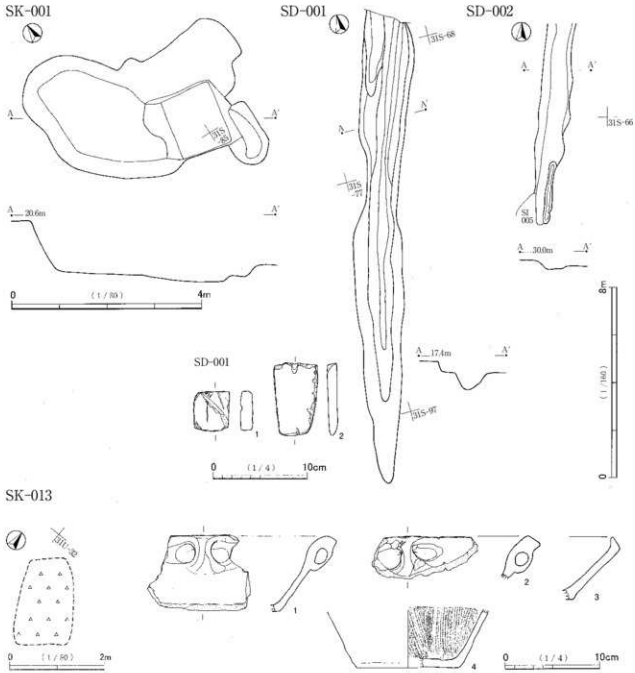
規模・形状　土坑底部の方形の形態から地下式坑かともみられるが，傾斜地という立地からみてその可能性は低い。時期・性格とも不明の土坑である。

出土遺物　中・近世の常滑焼とみられる甕の破片が出土した。

SK-013（第35図，図版11）

位置　調査区のほぼ中央，31U-42グリッド付近に位置する。

規模・形状　貝殻ブロックと縄文時代早期の条痕文系の土器片が若干出土した。縄文時代の地点貝塚の名残とみられるが，現場の所見では近世以降の撹乱によって移動した，二次的な堆積と考えられている。この貝層の周囲からかなりの量の近世陶磁器が出土しており，これらの遺物が撹乱の時期を示しているものと考えられる。



第35図　その他の遺構（2）及び出土遺物

出土遺物　1～4は在地産の中・近世土器である。1・2は内耳土器口縁部の破片，3も内耳土器と思われるが口縁部が内湾する特徴がある。1・3は焙烙ほどの器高の低さはなく，16世紀後半から17世紀代のものと推測できる。内耳土器の破片はほかに16点ほど出土している。4は中世の在地産土製擂鉢である。

上記の土器のほか陶磁器破片が15点出土している。陶器としては灰釉片口2点・腰錆茶碗1点・ほぼ完形の鉄絵丸碗1点・擂鉢2点があり，いずれも18世紀代の瀬戸・美濃産である。同時期の堺・明石系の擂鉢破片2点も出土している。ほかに灰釉の筒形香炉があるが，近代に入るものであろう。磁器7点の中には肥前産の三角高台皿（17世紀末）・蜻唐草文蛇ノ目凹型高台皿（18世紀後半～19世紀初頭）がある。

総じて江戸時代後期主体であるが，中世末から近代までの遺物が出土した。

SD-001（第35図，図版11）

位置　調査区北端部，31S-67 ～ 96 グリッド付近に位置する。

規模・形状　北北東－南南西方向に延びる溝で，調査範囲の北側にさらに続いているとみられる。延長20 m発掘され，31S-96 グリッド付近で途切れる。最大幅2.1 m，深さは最大で1 m，覆土は自然堆積である。溝底に硬化面は認められない。

出土遺物　奈良・平安時代の土師器細片や近世の土器片が若干出土した。遺物の様相から，本溝は近世以降に掘られたものと推測される。ほかに近世の砥石2点（1・2）が出土している。

SD-002（第35図，図版11）

位置　調査区北端部，SD-001 の西側 10 mほどの位置で平行している。

規模・形状　ほぼ南北方向に延びる溝で，これも調査範囲の北側まで続いているとみられる。最大幅は1.2 m，最も深い箇所で40cm程あり，延長8.5 m遺存している。溝の南端部の底に幅30cm・長さ2.6 m・深さ10cm程の細い溝が穿たれている。また，溝の南端部に SI-005 が重複している。

出土遺物　奈良・平安時代の須恵器大型甕口縁部の破片2点（別個体）が出土しているが，混入したもので溝の時期を示すものではなく，近世以降の溝とみてよいと考えられる。

3　調査区南半部の遺構（第8図）

SK-004（第36図，図版11）

位置　調査区中央部の東端 30U-88 グリッド付近に位置し，SK-007 に重複する。

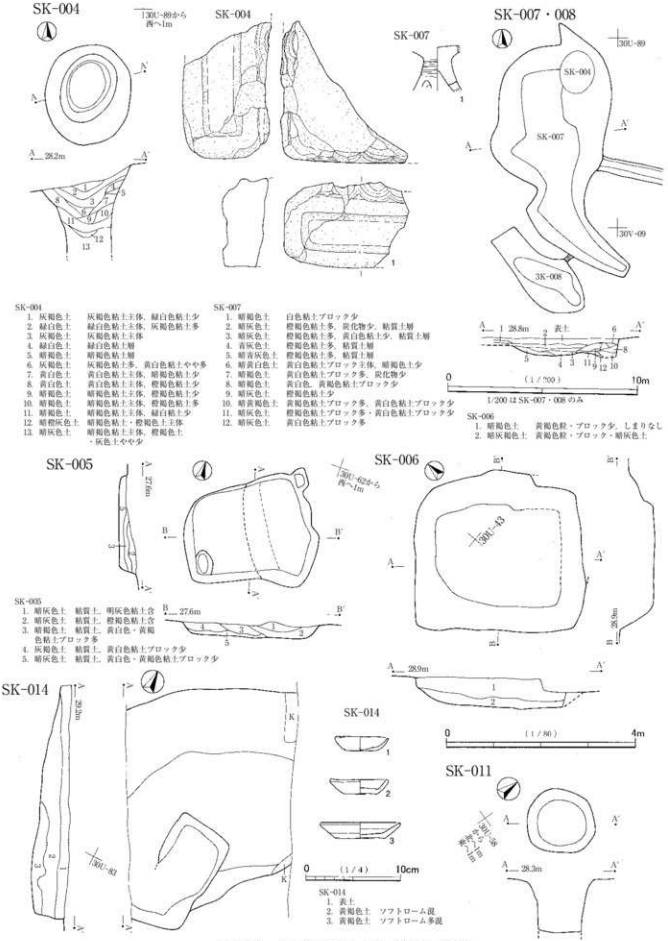
規模・形状　確認面での長径2.15 m・短径1.75 mの長円形である。確認面から1.95 mまで精査したが底に達せず，水も湧き出して危険なため，完掘は断念されたものである。徐々に径が小さくなり，確認面から80cmほど下で1.5 m× 1.1 m，発掘底面では0.95 m× 0.75 mとなる。相当深く掘られていることから，中・近世以降の井戸と推測される。

出土遺物　1は宝篋印塔の基礎部分の破片である。側面に格狭間を刻み，上面には返花座の蓮弁の線刻が残る。薄赤色安山岩製である。精緻な加工とはいえず，中世の所産とみられる。ほかに近世陶器口縁部の微細片1点，縄文土器数片と土師器細片1点が出土した。

SK-007・008（第36図）

位置　調査区中央部の東端 30U-89 グリッド付近に位置し，井戸 SK-004 に重複して，その南側に広がる土坑である。

規模・形状　南北に細長い土坑で，南端が湾曲し，全体では「し」の字のようなプランをもつが，全体に不整形で，計画的に掘られたようには考えられない。最大幅6 m，深さ50cm～ 70cm，横断面は鍋底形で，覆土は自然堆積の状況を示す。南北長13.5 mである。土坑の北東端部に井戸 SK-004 が存在するので，井戸に関連した遺構と考えられる。坑底や周囲に柱穴は一切認められず，上屋などは設けられていなかったようである。



第 36 図　その他の遺構（3）及び出土遺物

東辺の中央付近から，幅 80cm・深さ 40cm～ 50cmの直線的な溝が東に向かって延びている。また，南に接する SK-008 との間の 40cmほどの土手にも，両土坑をつなげる幅 15cmほどの溝が掘られている。現場段階では，２条の溝は排水のために掘られたものと推測されたが，溝は坑底から 40cm～ 50cm高い位置にあることから排水機能を有するか否か不明であり，性格不明の溝といえる。

なお，SK-008 は最大幅 2.6 m・長さ 6 m・最大深さ 80cmほどの不整な長円形土坑で，出土遺物はなく，時期・性格とも不明である。

出土遺物　SK-007 では 40 個体ほどの陶磁器類が出土している。磁器は 16 点で，うち 11 点は飯碗である。磁器の碗類は肥前産で，二重網線文１点のほかは梅樹文を主体とする「くらわんか碗」（厚手碗）（18 世紀前半）で，ほかに蔦翁印判で笹葉と菊花を描く丸碗（18 世紀後半）１点・筒茶碗（18 世紀代）１点・広東碗２点（18 世紀末～ 19 世紀初頭）などがある。このほか体部外面に飛び鉋文様をもつクロム青磁釉小碗（19 世紀代）が１点ある。陶器としては，腰錆茶碗２点・鉄絵丸碗２点・灰釉半球碗１点・鉄釉秉燭１点・灰釉耳皿１点・灰釉皿１点・灰釉片口鉢２点・灰釉徳利１点・鉄釉擂鉢２点・三足の筒形香炉２点などがあり，18 世紀代を主体とする瀬戸・美濃産である。ほかに，灯火具としては志戸呂産の灯明受皿が１点ある。これ以外の６点は近代の所産とみられ，産地不明のものもある。土器としては，在地産の瓶口縁部１点・内耳土器の破片４点が出土している。江戸時代後期の遺物を中心に多くの陶磁器類が出土し，比較的遺存度の良好なものも多い。井戸周囲で使用されていたものも含まれているとすれば，井戸及び本土坑がこの時代に機能していた可能性は十分考えられる。

ほかに，古墳時代中・後期の土師器高杯の脚柱状部の破片２点，及び外面に横線の施された古墳時代前期の高杯脚柱状部の破片（１）も出土している。脚の最上部に櫛描き直線文が施され，その下に３孔が穿たれる。

SK-008 では，瀬戸・美濃産擂鉢の口縁部細片１点・産地不明の灰釉皿口縁部細片１点・灰釉の上に内面のみ濃緑色の釉が斑状にかかる大型の水鉢の可能性がある細片１点などが採集されている。いずれも江戸時代後期以降のものであろう。

また，付近から 16 世紀中葉の瀬戸・美濃産鉄釉擂鉢片が出土している。

SK-005（第 36 図，図版 11）

位置　調査区中央部の東端 31U-61 グリッド付近に位置する。

規模・形状　確認面での長軸長 2.7 m・短軸長 2.0 mの不整な長方形状の土坑である。深さは土坑の南辺で 40cm，それ以外の部分は 20cm程である。覆土断面の観察から，２基の土坑が重複したものと捉えられ，東側半分が後から掘り込まれた土坑と考えられる。この土坑は不整五角形状で，南北方向の長軸長 2.4 m，短軸長は 1.4 m前後だったことになる。古い方の土坑は一辺 1.5 m前後の隅丸方形が本来の形状と推測される。いずれも性格不明の土坑である。

出土遺物　近世陶磁器類が 13 個体出土している。図示しないが，ほぼ完形の鉄絵半球碗１点（18 世紀後半～ 19 世紀初頭）・腰錆茶碗２個体分の細片（18 世紀代）・灰釉菊皿の細片１点（17 世紀代）・２合７勺ほど入る灰釉燗徳利（18 世紀中葉）１点・擂鉢口縁部細片１点（18 世紀後半）・三足付き筒形香炉などは瀬戸・美濃産の陶器である。また肥前磁器の端反碗２個体分は 19 世紀前半である。ほかに，産地不明の甕細片２点，柿釉の土瓶も江戸時代後期とみられる。

SK-006（第36図，図版11）

位置　調査区中央部の西端30U~43グリッド付近に位置する。

規模・形状　長辺3.5 m～3 mの比較的整った隅丸長方形プランである。深さは40cm～50cmで，壁の立ち上がりは緩い。坑底は白色粘土層に達している。遺存度の良好なものを含む近世陶磁器類が10点余り出土しているので，近世の遺構と考えられる。整ったプランを有する土坑なので，単なるゴミ穴ではないと思われるが，遺構の性格は不明である。

出土遺物　肥前産磁器は，くらわんか碗（厚手碗）（18世紀前半）が2個体あり，うち1個は口縁部をわずかに欠くほか完形である。瀬戸・美濃産陶器は，鉄釉の浅い小型鉢状で見込に重ね焼きされた三足の痕が残る完形品・灰釉三足筒形香炉・灰釉と飴釉の鉢ないし片口鉢の破片である。柿釉の土瓶は産地不明である。在地産土器は，口縁部1/4周の内耳土器・1/3周ほどのカワラケ破片である。18世紀代主体の遺物群とみられる。

SK-011（第36図，図版11）

位置　調査区中央部の東寄り，30U-48グリッド付近に位置する。

規模・形状　検出面での径1.35 m～1.40 m，下部での径0.9～1.0 mの比較的整った円形土坑である。検出面から1.2 mまで掘り下げたが底に達せず，危険なためそれ以上発掘できなかった。さらに深く続いているのは確実で，井戸跡とみて間違いないと思われる。出土遺物はないが，近世以降に掘られたものであろう。

SK-014（第36図，図版12）

位置　調査区中央部のやや南寄り，30U-73グリッド付近に位置する。

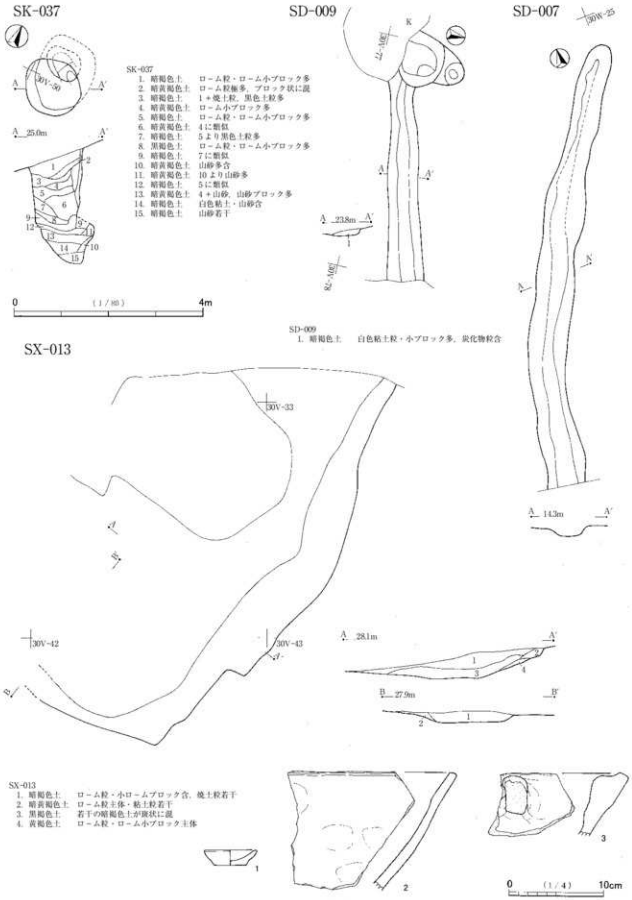
規模・形状　トレンチ調査時に確認された土坑である。南北方向の幅約4 m・深さ最大70cmの落ち込みが確認され，東西方向に溝状に続くかとみられたが，その延長部分は調査していない。この溝ないし土坑の底面に幅1.3 m・長さ2 m強の土坑が確認されたが，相互の前後関係は不明である。須恵器や土師器の微細片が若干出土したのみで，遺構の時期・性格ともに不明である。

出土遺物　1～3はカワラケで，全体の1/2～2/3が遺存した破片である。底部は回転糸切り無調整である。薄手で硬質であり，近世の所産である。このほかに，鉄釉天目茶碗の口縁部微細片1・擂鉢細片・灰釉鉢の口縁部細片2点（別個体）・鉄釉壺口縁部微細片1点などが出土している。いずれも18世紀代主体の瀬戸・美濃産製品であろう。

SK-037（第37図，図版12）

位置　調査区南部斜面の上部30V-50グリッド付近に位置する。

規模・形状　調査区南部の斜面部に存在する土坑は，複雑に切り合うものが多いが，本土坑は単独で存在する。長径1.5 m・短径1.2 mの南北方向に長い長円形プランをもつ。深さ1.6 mまでほぼ垂直に掘り込まれ，その下70cmほどは南方向に斜めに掘り込まれ，多少オーバーハングする。覆土にはロームブロック土や山砂などが多く含まれるので，人為的に埋め戻された可能性がある。かなり深い土坑であることから，井戸として掘り始められたが，湧水がないなどの事情から途中で放棄された可能性が考えられる。



第37図　その他の遺構（4）及び出土遺物

出土遺物はない。

SD-007（第37図，図版12）

位置　調査区最南端の斜面下部30W-34グリッド付近に位置する。

規模・形状　幅60cm～80cm・深さ10cm～20cmの溝で，長さ9m程を調査した。斜面に直交する方向に延びており，排水目的というより台地の上下を結ぶ道の一部ではないかと考えられる。出土遺物はなく，宝永火山灰なども確認されていないので，遺構の時期は不明である。

SD-009（第37図，図版12）

位置　調査区南端部斜面の上部30V-77グリッド付近に位置する。

規模・形状　幅45cm～75cm・深さ20cm～30cmの東西方向に延びる溝で，長さ4.5mほど調査された。西端部には性格不明の土坑が重複している。出土遺物はなく時期不明である。台地の縁に沿うような方向に延びているので，畑と山林を隔てる境界溝の可能性が考えられる。

SX-013（第37図，図版12）

位置　調査区南半部の台地平坦部から斜面にかかるあたりの30V-32グリッド付近に位置する。

規模・形状　南面する台地の縁辺という好立地にもかかわらず遺構がきわめて希薄な場所で確認された。おそらく中・近世以降の何らかの造成工事によって，奈良・平安時代の竪穴住居跡などそれ以前の遺構が破壊された痕跡と推測される。現存する東辺長9m，南辺は2.6mまで残るが，西と北辺は削られている。各辺の壁は緩やかに立ち上がり，深さは最大で60cmである。壁の立ち上がりも緩く，各辺のラインも不規則であり，明確な意図をもって掘り込まれた遺構かどうか不確実である。

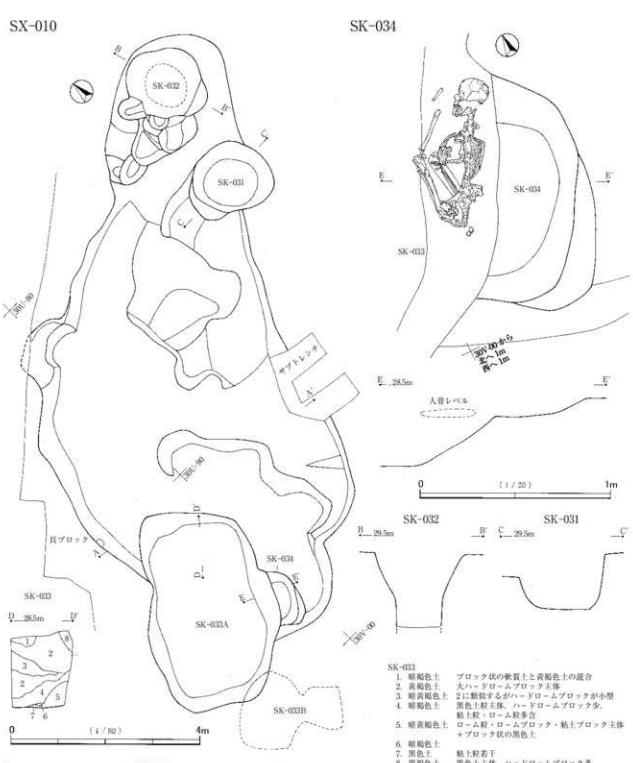
出土遺物　1は2/3周ほど遺存する小型のカワラケで，近世の所産である。2は深い鉢状の土器で，内面の口縁部下3.5cmの位置に体部との境となる稜が作り出されている。胎土その他は内耳土器に類似しており，実際に耳が付いていたか否かは不明であるが，器高があることから中世内耳土器（土鍋）であろう。3は内耳土器の破片で，ほかに内耳土器の細片が6点出土しており，中世内耳土鍋か近世焙烙の判別は困難である。また，瀬戸・美濃産の近世灯明受皿細片1・磁器碗2（中国産の可能性ある清朝丸碗，肥前の近代磁器碗か）・キセルの雁首細片なども採集されている。

SX-010（第38図，図版12）

位置　調査区南半部の台地平坦部の西側30U-80グリッド付近に位置する。

規模・形状　SX-010は北北東から南南西方向に長い，浅く不整形な土坑であり，これに幾つかの土坑が重複している。SX-010は長さ12.8m，幅は南半部で最大となり5.8mほどとなる。壁は緩やかに立ち上がり，断面形は浅い鍋底形である。全体にSX-013に類似した形状と立地を示しているといえる。また，遺構の北端部には井戸SK-032が重複しているので，同じく井戸であるSK-004と，井戸に関連した遺構とみられるSK-007との関係に非常に類似していることが注意される。なお，若干の貝殻ブロックと獣骨が西壁部で出土している。

出土遺物　径8cm・器高2.3cmほどのカワラケ（1）や内耳土器（2）が出土した。カワラケは本遺跡



第38図　その他の遺構（5）及び出土遺物

出土の他のものに比べやや器肉が厚いことから中世（16世紀後半）の所産の可能性があり，内耳土器は耳部なので中世か近世かは不明である。他に，江戸時代後期の肥前産磁器のくらわんか碗（厚手碗）（18世紀前半）の1/2周ほどの破片及び体部外面に飛び鉋文様をもつクロム青磁小碗（19世紀）の破片が出土している。遺物は中世末から近代まであり，遺構の時期は新しいが，古いものが混入した可能性が高い。

SK-031（第38図，図版12）

位置　SX-010の北端部に重複し，SK-032の南側に近接する。

規模・形状　1.7 m×1.5 mのほぼ円形である。深さは1.2 mで，底面は平らに仕上げられている。形状は井戸そのものといえるが，浅いことから，未完成の井戸の可能性がある。本遺構の西側には，高さ10㎝程度の階段状の掘込みがあり，井戸への出入りのために設けられたものと考えられる。

出土遺物　覆土中から奈良・平安時代の土師器細片18点が出土したが，遺構の時期を示すものではないであろう。

SK-032（第38図，図版12）

位置　SX-010の北端部に重複する。

規模・形状　検出面では径1.5 mの円形で，上部が漏斗状になり途中で90㎝前後の径となる。深さ1.5 mまで精査し，それ以上は危険なため調査できなかったが，井戸であることは確実である。本土坑の西側にも階段状の掘り込みがある。

出土遺物　近世陶磁器類の破片や土師器・須恵器の微細片などが出土したが，遺構の時期は不明である。

SK-033（第38図，図版13）

位置　SX-010の南端部に重複する。

規模・形状　長軸4.1 m・短軸2.7 m，深さは最大で60㎝の比較的整った隅丸長方形の土坑である。覆土中から縄文土器を主体とする多量の土器片が出土した。本土坑の南東隅の壁下部に横穴が確認され，南側に地下式坑状の土坑が掘り込まれていることが推測された。その部分の地山をバックホウで削ったところ，ローム粒を含む暗褐色土の面が確認された（図の破線部分）。安全対策上，それ以上の精査をせずに埋め戻したが，大小2つの方形土坑が重複している状況が確認された。暗褐色土層はかなりしまりがよく，中には縄文土器片を多く含んでいたとのことである。SK-033と一体の遺構なのか，偶然の重複か，未掘のため不明である。

出土遺物　1は径7㎝・器高2㎝前後のカワラケである。器厚が薄いことから近世とみられる。

SK-034（第38図，図版13）

位置　SK-033の東辺に重複する。

規模・形状　長軸1.15 m・現存部幅40㎝・深さ30㎝程の，本来は円形だったとみられる土坑である。西半分は，SX-010の覆土内に掘り込まれていたため把握されていない。土坑の西側で屈葬状態の人骨が出土した。頭を土坑北壁に付け，上体は右半身を下にして，西向きに寝かされる。脚は正座の状態である。土坑底が鍋底状なので，棺状の棺桶は使用していないと考えられるので，当初から横臥の状態で埋葬され

たのであろう。副葬品はなかった。

副葬品その他の共伴遺物がないため時期不明であるが，近世の井戸に伴う遺構 SX-010 の覆土を切り込んでいること，周囲に貝殻が全くないにもかかわらず良好に遺存していたことなどから，近代以降の遺体の可能性が高いとみられる。本土坑の南西 8 m～ 10 m程の位置に，規模・形態が類似した SK-022・026・029 やこれらより多少小規模の土坑が群集している。これらも墓坑であると仮定すると，この地区に墓地があったということになるが，ほかに人骨は出土していないので，明確なことはいえない。

SX-011（第 39 図，図版 13）

位置　調査区南端斜面の上部，29V-19 グリッド付近に位置する。

規模・形状　台地平坦面から南西斜面部に移行するあたりに土坑・ピットが密集して掘り込まれている。台地の縁辺に沿って，地山を 40cmほど掘り下げる台地整形が行われ，その下端線に併行して 15 基の土坑・ピットがほぼ 2 列になる様に並んでいた。これらから南に多少離れた位置に SK-030 が存する。台地整形とこれらの土坑を総称して SX-011 の遺構名が付されている。

土坑群の中では群の北西部にある SK-026 が最大で，1.7 m× 1.3 mの長円形，SK-022・SK-027 がこれに次ぐ規模をもつ。この 3 基以外は規模が小さくなり，またより細長い長円形プランをもつ。検出面からの深さはどれも 20cm～ 30cmと，それほど深くない。

土坑群のある一帯は，縄文時代後・晩期の土器片がおびただしく散布しており，土坑周囲からも多量の土器が出土しているが，土坑との関連は不明である。土坑はほぼ列状に並んでいるが配置は不規則で，浅いこともあり欄列とは認められない。SK-022・026・027 など北西部のやや大型の土坑は，SK-034 のような墓坑の可能性はあるが，確証はない。すべて時期，性格とも不明であるが，南側斜面部で検出された SK-020 等の土坑群同様，台地整形された斜面下の平場内の土坑群であることから，中・近世の遺構の可能性が高いと考えられる。

SK-030（第 39 図）

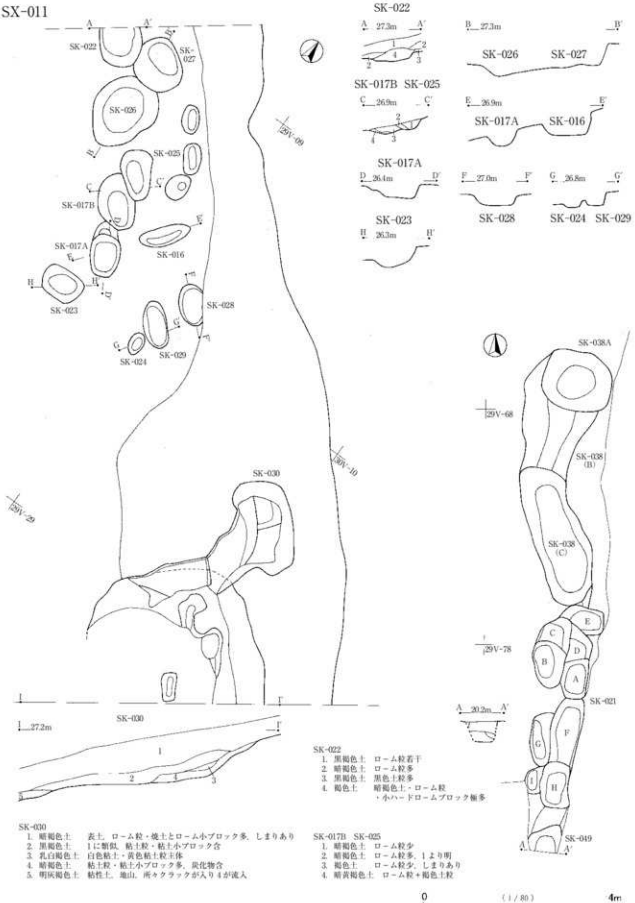
位置　調査区南端部の斜面上部，30V-10 グリッド付近，SX-011 の南東部に位置する。

規模・形状　斜面の下側に一辺 3 m以上，北側での深さ 0.9 m～ 1 mの不整な隅丸方形の土坑があり，底面は比較的平坦であるが，壁際に幾つか不整形な掘り込みが見られる。底面は白色粘土層を掘り込んでいること，土坑の周囲は縄文時代後・晩期の遺物包含層となっており，当該期の粘土採掘坑の可能性も考えられる。この遺構の北側に，軸長 2 m× 1 m程の隅丸長方形の土坑があり，その南から下側の土坑との間をつなぐような掘り込みが張り出している。上下 2 基の土坑の関係は不明である。

SK-021･038 ほか（第 39 図，図版 13）

位置　調査区南端部の斜面の中腹，29V-68 グリッド付近に位置する。

規模・形状　遺跡南端部の斜面中腹で，土坑群が斜面に直交する南北方向に列状に並んでいた。南北 10.4 mの間に 14 基の土坑が並び，互いに重複していた。斜面上方には径 1.5 m× 1.2 m，深さ 50cmの不整円形土坑である SK-038A，幅 1 m・深さ 20cm・長さ 2.7 mの細長い SK-038C があり，その間をつなぐ深さ 10cmほどの SK-038B がある。SK-038 の南側には，幅 0.5 m程度・長さ 1.0 mの南北方向に長い隅丸方



第39図　その他の遺構（6）及び出土遺物

形プランの土坑がほぼ2列になって並んでいる(SK-021A～I, SK-049)。深さはいずれも30cm前後である。覆土中から多少の縄文土器片が出土しているが，周囲の斜面部は大量の縄文土器片の散布地であることから，混入したもので，中・近世以降の遺構の可能性が考えられる。

これらの土坑列の，北方向の延長線上に，SK-022ほかの土坑群SX-011が位置している。両土坑群もほぼ2列に並んでいたことから，両遺構群の関連も推測できるが，その中間の土坑は検出されていないので，両者が本来一連のものだったかどうかは不明である。

SX-012（第40図，図版13）

位置　調査区南端斜面の西半部，29V-37グリッド付近に位置する。

規模・形状　ほぼ南北方向に連なる土坑列であり，斜面に対しては斜め方向に延びる。長さ15.2 mが調査された。規模・形状とも不規則な土坑あるいはピットが互いに重複し，おおむね2列に並んでいる。不整な長円形プランのものが多く，長軸を列の方向（南北方向）に向けるのが基本の様である。幅50cm程度・長さ1 m内外のものが多い。深さも不規則で，20cm～30cm平均であるが，規模の大きい円形プランのものに80cmほどの深いものも認められる。植栽痕跡列の可能性も考えられる。中ほどで西側に寄った位置にある土坑（29V-36グリッド周辺）は1.7 m×1.4 mと大きく，深さも80cm以上あり，形状的には土坑墓に近く，他の一連の土坑・ピット群とは性格の異なる遺構の可能性もあろう。

出土遺物　内耳土器の体部1/3周ほどの破片が出土している。ほかに奈良・平安時代の土器が見られ，全体の60%ほどが遺存した土師器杯の破片1点・須恵器杯の細片2点・土師器皿の細片1点，甕はいずれも口縁部の微細片で，土師器2点・須恵器1点が出土している。ほかに縄文土器片も採集されている。ほかにSX-012の西端部にあったSK-047で奈良・平安時代の土師器杯3/4周ほどの破片が出土している。また，SK-041では奈良・平安時代の須恵器甕口縁部破片，SK-040では須恵器甑の底部微細片などが出土しているが，いずれも混入品であろう。

SK-018・019・052（第40図，図版14）

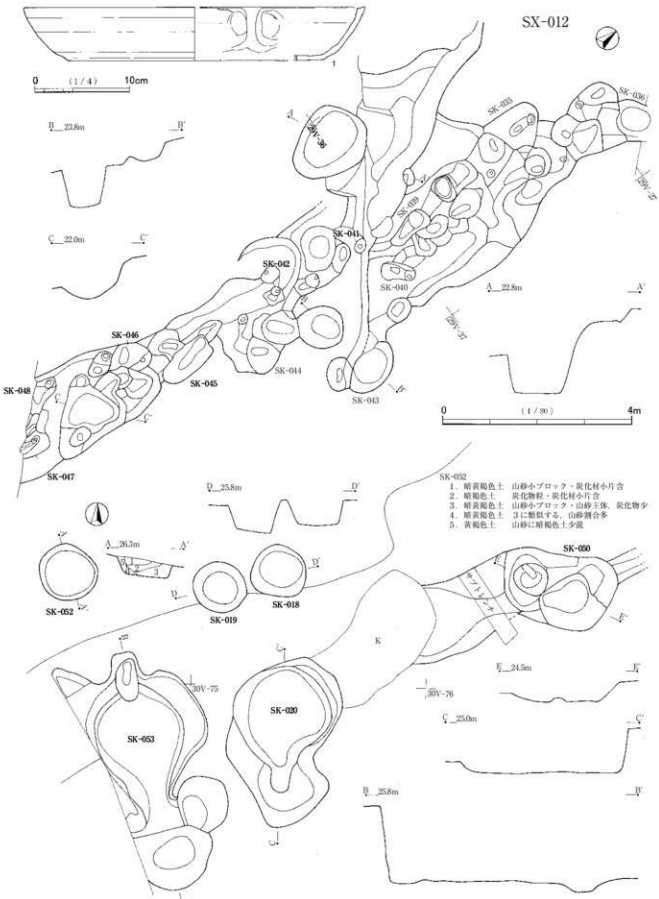
位置　調査区南端斜面の東半部，30V-75グリッド付近に位置する。台地の平坦部から南側斜面に移行する地点で，台地縁辺に沿う様に並んで検出された土坑群である。

規模・形状　径1.1 m～1.2 mの整った円形プランで，深さが40cm～70cmを測る。六道銭など出土していないが，形状・規模などから近世の墓坑ではないかと推測される。物井地区の御山遺跡では近世（18～19世紀）の土葬墓10数基が確認されているが，これと形状・規模が類似しているので，土葬墓の可能性は高いと考えられる。

SK-020・050・053（第40図，図版14）

位置　調査区南端斜面の東半部，30V-75グリッド付近に位置する。上記SK-018などより一段低い面に掘り込まれている。

規模・形状　SK-020とSK-053は，瓢箪形の平面プランをもち，長軸を南北方向にとる。この2基は東西に並んでおり，規模・形状とも類似している。主体となる土坑は径2.2 m～2.5 mの円形で，深さは北側で1 m～1.5 mある。南（谷）側に向かって壁は低くなっていき，南側は40cm～50cmの幅で開口する。



第40図 その他の遺構（7）及び出土遺物

開口部の南に径1.5 m前後，深さ30cm～40cmの土坑が穿たれる。この2基が同じ目的で掘られたことは確実だが，その目的は不明である。土坑内からの出土遺物はなく，時期も不明である。

SK-050は複数の土坑が重複したようなプランをもつ。当初，西側の円形部分で木炭が出土したので炭窯の前庭部の可能性が考えられたが，炭の量は少なく，結局炭窯本体部も見出されなかった。性格不明の土坑である。

出土遺物　SK-050では瀬戸・美濃産錆釉の灯明受皿（近世）の完形品が出土している。SK-053では陶器の汁注の蓋が出土している。上面に錆釉がかけられているもので，近代の製品の可能性もある。

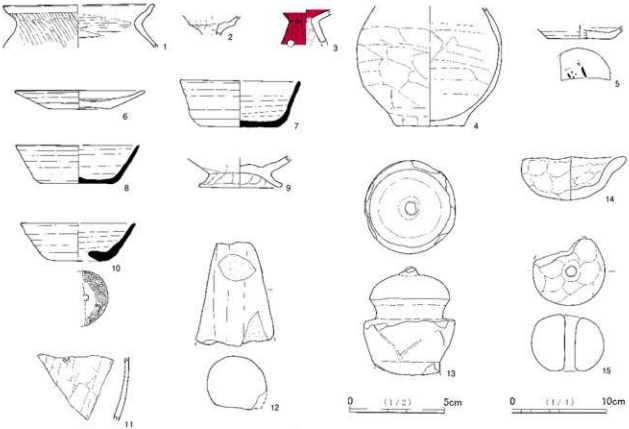
4　遺構に伴わない遺物（第41図）

確認調査段階のトレンチ調査，本調査時の表土除去・遺構検出作業などで，遺構に伴うものと判断できない段階で採集した遺物について報告する。縄文土器以外では，量的にはほとんど奈良・平安時代の土師器・須恵器の細片である。

土器　1～4は古墳時代前期の土器である。1はいわゆるS字状口縁甕形土器の口頸部1/6周ほどの破片である。S字の屈曲は弱く，口唇端部は平坦に仕上げられる。口縁部横ナデ，頸部から肩部にかけて外面には斜め方向の刷毛目のみ，頸部内面には横方向の刷毛目が残る。器表は黄灰色で，胎土には橙色のスコリアを含み，明らかに在地の土ではない。伊勢湾沿岸地域からの搬入品であろう（31S-83グリッド出土）。2・3は小型器台で，2は杯部底部の細片（31U-15グリッド出土），3は杯部底部から脚柱上部の破片，脚には3孔が空けられる。外面全体と杯部内面が赤彩される（31T-02グリッド出土）。器台2点の胎土はいずれも在地のものである。4は甕形土器で，底部全周，胴下半部1/2～1/3周の破片である。器壁は薄い。胴部に刷毛目は全く認められず，内外面ともヘラケズリの後ナデ調整が施されている（31T-14グリッド出土）。

5～11は奈良・平安時代の土器である。5は土師器杯底部片で，底面に2本の直線状の墨書が認められる（31U-22グリッド出土）。6～9は確認調査段階で，北部のトレンチ3（SI-013の西側）から一括出土した土器である。同一時期の遺物で，遺存度も良好なのでおそらく竪穴住居跡内に存在していたものであろう。トレンチ調査地点ではカマドは確認されておらず，床面も把握されていないが，斜面部に位置するので，他の竪穴住居跡同様，竪穴の掘り込みが厚く堆積した黒色土内にとどまっていたために確認できなかったものと思われる。6は土師器皿で，底面は一方向の手持ちヘラケズリ，体部下端部も手持ちヘラケズリで調整される。7は須恵器杯で，底面とその周囲は回転ヘラケズリされる。8は内外面とも黒色で，特に内面の黒みが強い。底部外面は灰色である。底面は一方向のヘラケズリ，その周囲も手持ちで横方向にヘラケズリされる。9は台付甕の台部から胴下端部の破片で，台部は完存している。台は粗雑な作りで，裾部は横ナデされるが全体に波打っている。台内面には指頭による押さえ付け痕が幾つかの凹みとして残る。胴部内底面では逆に瘤状の膨らみとして残る。胴部外面は縦方向にヘラケズリされる。11は土師器甕の胴部破片で，焼成後の穿孔が1個認められる。穿孔は両面から行われているが，その意図は不明である（31U-03グリッド出土）。10は須恵器杯の1/3周ほどの破片で，底部中央付近に穿孔が認められる。底部は回転糸切り無調整，体部下端のみ回転ヘラケズリされる。これも穿孔の意図は不明である（31U-13グリッド出土）。

土製品その他　12は土製支脚の上半分ほどの破片で，よく焼けている（31U-14グリッド出土）。14は



第 41 図　遺構外出土遺物

手捏ねのミニチュア土器で，椀状の体部をもち，口縁部が一か所でつまみ状に引き出される（31U-33 グリッド出土）。15 は臼玉状の土玉で，全体の 1/4 ほどを欠く（31U-24 グリッド出土）。

13 は石塔で，おそらく中世宝篋印塔の相輪頂部の宝珠部分の破片で，黒色多孔質安山岩製である。SI-039 の直上で出土したが，もちろん住居跡に伴う遺物ではない。SK-004 出土の宝篋印塔基礎部分の破片も安山岩製であるが，材質が異なるものである。

第1表　嶋越遺跡竪穴住居跡一覧表

＊竪穴規模は長軸×短軸　＊＊壁溝は幅×深さ

遺構番号	位置	主軸方向	竪穴規模（m）	壁高（cm）	壁溝（cm）	柱穴深さ（cm）	貯蔵穴	出入口ピット	カマド	時期	備考
SI-008	31S-87	N-15.0°-E		30～58		P1 22 P2 31			○	奈・平	東から南辺欠
SI-009	31S-83	N-16.5°-E	3.4×3.3	12～29				○	○	奈・平	
SI-010	31T-05	N-71.5°-W	3.48×－	7～51		P1 29 P2 36 P3 26 P4 36		○	○	奈・平	南辺欠
SI-011	31T-17	N-89.0°-W	3.79×3.65	11～68		P1 46 P2 25 P3 28 P4 24		○	○	奈・平	SI-012を切る
SI-012	31T-16	N-66.0°-W	5.3×5.0	12～65		P1 50 P2 27 P3 42 P4 41			○	奈・平	東辺欠。SI-011に切られる。
SI-013	31T-24	N-46.5°-W	4.1×3.5	5～26	15×13	P1 50 P2 54 P3 59 P4 40			○	奈・平	
SI-014	31T-26	N-54.5°-W		9～40		P1 30 P2 28			○	奈・平	北・東・南辺欠。浄瓶・土師型杯出土。
SI-015	31S-45	N-29.0°-W	3.9×－	15～33		P1 22 P2 38		○	○	奈・平	西・東辺欠
SI-016	31S-76	N-40.0°-W	4.96×－	20～51	18×4	P1 15 P2 12 P3 27				古墳	北・東・南辺欠
SI-017	31S-83	N-32.0°-W	5.5×5.7	24～53		P1 55 P2 50 P3 17 P4 68	○		○	古墳	西辺欠
SI-018	31S-87	N-12.5°-W	3.5×－	16～21	16×7	P1 42 P2 29				奈・平	東辺欠
SI-019	31T-07	N-28.5°-W	34.2×33.1	6～17		P1 13 P2 17 P3 17 P4 18			○	奈・平	
SI-020	31T-03	N-91.0°-W	3.58×3.4	2～45		P1 25 P2 33 P3 25		○	○	奈・平	南東辺欠
SI-021	31T-18	N-91.1°-W	3.58×3.5	2～45		P1 25 P2 33 P3 25			○	奈・平	カマド竪穴隅に設置
SI-022	31T-28	N-91.2°-W	3.58×3.6	2～45		P1 25 P2 33 P3 25			○	奈・平	東辺欠
SI-023	31T-27	N-65.0°-W		16～21					○	奈・平	カマドのみ遺存
SI-024	31T-37	N-61.0°-W		8～38					○	奈・平	北・東辺欠
SI-025	31T-47	N-49.0°-W		36～41					○	奈・平	北・東辺欠
SI-027	31U-34	N-71.5°-W	2.85×－	23～37					○	奈・平	北辺欠
SI-028	31T-84	N-11.5°-E		4～33		P1 8 P2 10 P3 32 P4 23				奈・平	東・南・西辺欠
SI-029	31U-14	N-8.5°-W	2.9×2.6	58～74					○	奈・平	東西辺欠
SI-030	31U-36	N-9.8°-W	3.04×－	14～40	32×10				○	奈・平	東辺欠
SI-031	31U-16	N-49.5°-E		13～24					○	奈・平	カマド周辺のみ遺存
SI-032	31U-06	N-17.2°-E	2.77×－	27～35					○	奈・平	東辺欠。SI-033を切る。
SI-033	31U-05	N-61.0°-W	3.54×3.94	9～28		P1 28 P2 14 P3 43 P4 34			○	奈・平	SI-032に切られる
SI-034	31U-06								○	奈・平	カマドのみ遺存
SI-035	29V-57	N-58.0°-E	3.4×－ 2.3×－	12～29 11～12					○	奈・平	新旧2期の竪穴。西辺欠。
SI-036	30V-87	N-43.8°-W	2.54×－	20～47					○	奈・平	東・西辺欠
SI-037	29W-38	N-7.8°-W					○			奈・平	西・南辺欠
SI-038	30W-10	N-91.0°-E	3.84×3.48	64～77					○	奈・平	南辺欠
SI-039	30W-11	N-95.0°-E		16～57						奈・平	南辺欠

第２表　嶋越遺跡竪穴住居跡出土土器観察表

＊口径・底径の（ ）内数値は推定径，器高の〔 〕内数値は現存高，単位はcm

遺構番号	掘調番号	器種	器種	遺物No.	口径	底径	器高	遺存度(%)	色調	内面調整	外面調整	底部調整	備考
SI-008	第11図-1	縄文器	杯	1	(13.5)	-	[3.6]	10	灰褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ		
SI-008	第11図-2	縄文器	壺	1	(13.8)	-	[4.7]	5	灰	ナデ	ナデ		
SI-008	第11図-3	土師器	壺	1-3・4・5・6・7・8	(27.4)	-	[30.2]	40	褐	ナデ，ヘラナデ	ナデ，ヘラナデ→ミガキ		
SI-009	第12図-1	縄文器	杯	1	(13.0)	(7.2)	3.5	15	黒褐	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	
SI-009	第12図-2	縄文器	杯	1・6	12.7	7.4	4.1	60	赤褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-3	縄文器	杯	11	(13.2)	(7.4)	4.4	30	赤褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-4	縄文器	杯	1・13	(12.9)	7.4	4.65	60	黒	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-5	縄文器	杯	1	(12.9)	(6.8)	4.35	30	黒褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-6	縄文器	杯	1	-	(8.4)	[3.3]	5	灰	ナデ	ナデ	手持ちヘラケズリ	
SI-009	第12図-7	縄文器	杯	1	-	(6.4)	[3.0]	20	灰	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	
SI-009	第12図-8	縄文器	杯	1	-	(8.4)	[2.8]	10	灰白	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	
SI-009	第12図-9	縄文器	杯	1	-	(7.2)	[2.1]	20	灰	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-10	縄文器	杯	9	-	(7.0)	[1.9]	20	灰褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	
SI-009	第12図-11	縄文器	杯	1・12	-	(7.2)	[1.5]	30	黒	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-12	縄文器	杯	1	-	(7.2)	[1.5]	10	黒褐	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-13	土師器	椀	1・14・15	14.6	6.2	2.1	80	黄褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-14	土師器	椀	1・10	(13.0)	6.1	1.3	40	黄褐	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-15	土師器	杯	1・30・34・36・37	12.0	5.6	4.15	80	黄褐	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ（全面）	
SI-009	第12図-16	土師器	杯	1・15	12.6	7.9	5.1	90	黄橙	ナデ→ミガキ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ（全面）	内面黒色処理
SI-009	第12図-17	土師器	杯	1・61・61-1	(15.1)	-	[4.1]	5	赤褐	ナデ→ミガキ	ナデ		
SI-009	第12図-18	土師器	壺	20	(18.1)	-	[5.1]	5	黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ→ナデ		脚土に長石・雲母
SI-010	第13図-1	縄文器	杯	1	(13.4)	(7.2)	4.0	20	灰	ナデ	ナデ	手持ちヘラケズリ	脚土に長石・雲母
SI-010	第13図-2	縄文器	杯	1	-	(7.4)	[1.2]	15	灰	ナデ	ヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	脚土に長石
SI-010	第13図-3	縄文器	杯	1	-	(7.2)	[2.2]	10	灰黒	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り	脚土に長石・雲母
SI-010	第13図-4	土師器	杯	1	11.1	-	4.0	70	褐	ナデ	ナデ→ヘラケズリ		赤ロクロ
SI-010	第13図-5	縄文器	壺	1・11	-	-	-	10	灰	ナデ	ナデ→ナデキ		脚土に長石
SI-010	第13図-6	土師器	壺	2	(24.8)	-	[5.7]	5	黄褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		
SI-010	第13図-7	土師器	壺	1	-	5.2	[6.9]	5	黄褐	ヘラナデ→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ		脚土に長石・雲母
SI-010	第13図-8	土師器	壺	1・5・10	-	(9.6)	[13.6]	10	黄褐	ナデ，ヘラナデ	ヘラケズリ→ヘラナデ	ヘラケズリ→ヘラナデ	脚土にスコリア
SI-011	第14図-1	縄文器	杯	8	-	7.4	[1.7]	25	黒褐	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	
SI-011	第14図-2	土師器	杯	10	(11.6)	(7.0)	4.6	40	褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-011	第14図-3	土師器	杯	1・61・61-2・1	(11.6)	-	[4.2]	30	黒褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ		脚土にスコリア
SI-011	第14図-4	縄文器	壺	2	(28.4)	-	[25.6]	20	黄灰	ナデ	ナデ→ナデキ		脚土に雲母
SI-011	第14図-5	縄文器	壺	1・61・61-2・1	-	-	[4.9]	5	灰	ナデ	ナデ，ヘラナデ		脚土に雲母
SI-011	第14図-6	土師器	壺	1	(19.0)	-	[10.0]	5	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		
SI-012	第15図-1	縄文器	杯	1	(13.7)	7.0	4.0	40	黒褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-012	第15図-2	土師器	杯	3	(11.2)	-	[2.8]	20	黒褐	ナデ→ミガキ	ナデ→ヘラケズリ		赤ロクロ，内面黒色処理
SI-012	第15図-3	土師器	杯	5	-	(8.5)	[2.2]	20	黄褐	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ，ヘラナデ	脚土にスコリア
SI-012	第15図-4	土師器	高台付杯	1	-	6.1	[1.9]	20	黄褐	ナデ	ナデ	高台貼り付け後ナデ	体部破砕痕加工か？
SI-012	第15図-5	縄文器	壺	1	(22.0)	-	[7.3]	5	黒褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ→ナデキ		
SI-013	第16図-1	縄文器	高	1	(12.3)	-	[1.1]	5	灰	ナデ	ナデ		脚土に長石
SI-013	第16図-2	縄文器	杯	1	(12.2)	7.5	4.2	30	灰	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	底部内面に線刻「+」・火棒
SI-013	第16図-3	縄文器	杯	14	12.4	7.7	4.1	70	灰	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	
SI-013	第16図-4	縄文器	杯	33	12.1	7.8	4.1	60	黒褐	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	
SI-013	第16図-5	縄文器	杯	32	(12.4)	7.1	3.9	40	灰	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-013	第16図-6	縄文器	杯	1	-	(7.8)	[3.0]	20	灰	ナデ	ナデ	手持ちヘラケズリ	脚土に長石・雲母
SI-013	第16図-7	縄文器	杯	19	-	(8.0)	[3.2]	10	灰褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	外面に火棒
SI-013	第16図-8	縄文器	杯	20	-	(6.8)	[3.1]	30	灰黒	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
SI-013	第16図-9	縄文器	杯	29	-	(8.0)	[2.5]	20	灰黒	ナデ	ナデ→強風下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	外面に火棒
SI-013	第16図-10	土師器	杯	1	-	(6.3)	[1.7]	10	黄褐	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	
SI-013	第16図-11	縄文器	壺	1	(20.6)	-	[6.5]	5	灰褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ→ナデキ		
SI-013	第16図-12	縄文器	壺	22	20.2	-	[10.1]	20	黄灰	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ→ナデキ		脚土に黒色粒
SI-013	第16図-13	縄文器	壺	1・26	-	(12.6)	[14.0]	20	灰褐	ナデ	ナデ→ナデキ		
SI-013	第16図-14	縄文器	壺	25	-	-	-	5	灰	ナデ	ナデキ		脚土に長石
SI-013	第16図-15	縄文器	椀	1	-	(14.4)	[1.3]	5	灰褐	ナデ	ヘラナデ	無調整	
SI-013	第16図-16	土師器	壺	1・23	19.9	-	[8.2]	20	黄褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ		内外面摩耗激しく調整不明瞭，脚土に長石・雲母
SI-013	第16図-17	土師器	壺	1	(16.4)	-	[5.2]	5	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		
SI-013	第17図-18	土師器	椀	1・9・10	(27.7)	-	[9.8]	20	橙褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		
SI-014	第18図-1	縄文器	高	1	(16.6)	-	[1.6]	10	黒灰	ナデ	ナデ→回転ヘラケズリ		脚土に雲母 脚可動性
SI-014	第18図-2	縄文器	杯	2・24	(13.6)	9.0	3.9	60	灰	ナデ	ナデ→強風下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	脚土に長石・雲母

遺構番号	神図番号	器種	器種	遺物No.	口径	底径	器高	遺存度(%)	色調	内面調整	外面調整	底部調整	備考
S1-014	第18図-3	須恵器	杯	19	-	(8.2)	[3.1]	10	黒褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	
S1-014	第18図-4	須恵器	杯	15	-	6.3	[3.3]	50	灰褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
S1-014	第18図-5	須恵器	高台付杯	7	(13.4)	(10.6)	4.1	25	灰	ナデ	ナデ	回転ヘラケズリ→高台貼り付け後ヨコナデ	
S1-014	第18図-6	土師器	高	1	-	-	-	5	灰褐				
S1-014	第18図-7	土師器	高	1	(14.3)	(10.9)	3.2	30	橙褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	体部内面に暗文・土師整形
S1-014	第18図-8	須恵器	浄瓶	1			頸片			ロクロ調整	ロクロ調整		灰釉
S1-014	第18図-9	土師器	小型甕	1	14.4	5.4	15.8	100	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ	手持ちヘラケズリ	
S1-014	第18図-10	土師器	甕	1	(29.6)	-	[9.9]	10	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		脚土に細かい白色粒
S1-014	第18図-11	土師器	甕	9-11-14-24	-	(11.6)	[25.7]	20	橙褐	ナデ、ヘラナデ	ナデ→ヘラケズリ→ミガキ	ヘラケズリ	脚土に混母
S1-014	第18図-12	土師器	甕	2-3-24	-	5.4	[25.6]	30	褐	ナデ、ヘラナデ	ヘラケズリ→ヘラナデ		器壁きわめて薄い
S1-015	第19図-1	須恵器	杯	11	(13.5)	8.3	4.0	50	灰	ナデ	ナデ→体部下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ（全面）	
S1-015	第19図-2	須恵器	杯	1-22	(12.6)	(8.2)	3.4	20	灰	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	脚土に細かい白色粒
S1-015	第19図-3	須恵器	杯	16	(12.6)	-	[3.3]	10	黒灰	ナデ	ナデ→体部下位回転ヘラケズリ		
S1-015	第19図-4	須恵器	甕	7	-	-	-	5	灰	ナデ	ナデキ		
S1-015	第19図-5	土師器	小型甕	1	(11.5)	-	[3.6]	5	橙褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		
S1-015	第19図-6	土師器	甕	14	(17.7)	-	[7.3]	5	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		内外面摩耗激しく調整不明瞭、脚土に長石・雲母
S1-015	第19図-7	土師器	甕	1	-	6.5	[5.1]	20	黒褐	ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	内外面摩耗激しく調整不明瞭、器壁薄い
S1-016	第19図-1	須恵器	高台付杯	17	-	(11.2)	[1.7]	5	灰白	ナデ	ナデ	回転ヘラケズリ→高台貼り付け後ヨコナデ	
S1-016	第19図-2	土師器	杯	2	(13.1)	-	3.8	40	黒褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ		赤ロクロ
S1-016	第19図-3	土師器	杯	4	(11.5)	-	[4.2]	30	黒褐	ナデ、ミガキ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ		赤ロクロ
S1-016	第19図-4	土師器	杯	1	(12.6)	-	[2.7]	5	橙褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ		赤ロクロ
S1-017	第19図-1	須恵器	高	1-14-15	10.6	-	[2.9]	60	灰褐	ナデ	ナデ→回転ヘラケズリ		
S1-017	第19図-2	土師器	杯	1-13	13.2	-	6.2	90	褐	ナデ、ミガキ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ		赤ロクロ
S1-017	第19図-3	土師器	杯	1	(12.5)	-	[4.1]	20	橙褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ		赤ロクロ
S1-017	第19図-4	土師器	杯	7-8-9	(10.8)	-	[3.1]	30	褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ		赤ロクロ
S1-017	第19図-5	土師器	小型甕	16	12.7	5.6	12.3	70	黒褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ	手持ちヘラケズリ	
S1-017	第19図-6	土師器	小型甕	1	(12.2)	-	[4.4]	5	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		
S1-018	第20図-1	須恵器	杯	1	(12.9)	(7.6)	3.45	5	灰	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	脚土に長石
S1-018	第20図-2	須恵器	杯	1	-	(7.4)	[2.6]	10	灰	ナデ	ナデ→体部下位回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ（全面）	脚土に雲母・長石
S1-018	第20図-3	土師器	甕	1	(22.0)	-	[13.3]	20	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		脚土に雲母・長石
S1-018	第20図-4	土師器	甕	1	(23.0)	-	[5.5]	5	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ		脚土に雲母・長石
S1-019	第20図-1	須恵器	杯	10	11.8	7.7	4.3	80	黒	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	口縁部打ち欠き
S1-019	第20図-2	須恵器	甕	12	(22.6)	-	[15.3]	10	灰褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ナデキ		
S1-019	第20図-3	土師器	小型甕	5	(13.0)	-	[4.9]	20	黒褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ		外面調整激しく調整不明瞭
S1-019	第20図-4	土師器	甕	4-6	(20.2)	-	[6.4]	10	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		
S1-019	第20図-5	土師器	高杯？	1	-	4.0	[4.1]	?	黒褐	ナデ	粗雑なナデ		ミニチュア土器
S1-020	第21図-1	土師器		12-15	(12.8)	7.2	2.8	40	黒褐	ナデ→ミガキ	ナデ	回転糸切り→ナデ	
S1-020	第21図-2	土師器	高台付杯	59	(13.4)	-	[2.9]	25	橙褐	ナデ	ナデ	回転糸切り→高台貼り付け後ヨコナデ	
S1-020	第21図-3	土師器	杯	1-15-16	14.0	6.6	4.2	100	黒褐	ナデ	ナデ→体部下位回転ヘラケズリ	回転糸切り→回転ヘラケズリ（外周）	
S1-020	第21図-4	土師器	杯	14	(13.2)	(6.4)	4.5	20	黒褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	
S1-020	第21図-5	土師器	杯	1	(12.6)	-	[3.4]	10	黒褐	ナデ	ナデ		
S1-020	第21図-6	土師器	杯	18-19	(13.8)	-	[4.6]	10	黒褐	ナデ	ナデ		
S1-020	第21図-7	須恵器	甕	20	(18.3)	-	[4.1]	10	褐	ヨコナデ	ヨコナデ→ナデキ		
S1-020	第21図-8	須恵器	甕	42-43	(22.6)	-	[5.6]	5	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ナデ→ナデキ		
S1-020	第21図-9	土師器	小型甕	30-32-33-34-35-37-38-39-46-60-61	(14.5)	7.4	16.4	70	黒褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ	ロクロ成形の可能性
S1-020	第21図-10	土師器	小型甕	40-51-57	14.0	-	[10.5]	30	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		ロクロ成形の可能性
S1-020	第21図-11	土師器	小型甕	1-9-11	(12.2)	-	[8.5]	20	黒褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ナデ		ロクロ成形の可能性
S1-020	第21図-12	土師器	甕	17-27-28-49	(19.4)	-	[5.5]	5	褐	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラナデ		混在部分の可能性
S1-021	第22図-1	須恵器	高	1-7	-	-	[1.8]	5	灰	ナデ	ナデ→回転ヘラケズリ		脚土に雲母少量
S1-021	第22図-2	須恵器	杯	5	(13.8)	9.0	4.2	60	灰	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（全面）	脚土に雲母
S1-021	第22図-3	須恵器	杯	1	(13.6)	-	[4.0]	30	黒灰	ナデ	ナデ		脚土に雲母
S1-021	第22図-4	須恵器	杯	1	-	(7.4)	[2.5]	10	灰	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	
S1-021	第22図-5	須恵器	杯	1-11	-	7.8	[1.6]	20	灰	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	脚土に雲母
S1-021	第22図-6	須恵器	高台付杯	2	-	(9.2)	[1.7]	5	灰	ナデ	ナデ	回転ヘラケズリ→高台貼り付け後ヨコナデ	
S1-021	第22図-7	須恵器	甕	4-8-9	-	-	[14.4]	10	灰	ナデ	ナデ→ナデキ		
S1-021	第22図-8	土師器	甕	1-3	(18.4)	-	[10.0]	10	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		
S1-021	第22図-9	土師器	高杯	1	-	-	[5.0]	5	橙褐	ナデ	ナデ		混和剤状部の再利用か？

遺構番号	神図番号	器種	器種	遺物No.	口径	底径	器高	遺存度(%)	色調	内面調整	外面調整	底部調整	備考
51-021	第23図-10	土師器	杯	1-14	(13.2)	-	3.6	20	褐	ナデ	ヘラケズリ→ナデ		内外面赤彩
51-022	第23図-1	須恵器	盤	2	17.6	-	2.7	95	灰	ナデ	ナデ		脚土に細かい黒母
51-022	第23図-2	須恵器	杯	5	(13.0)	-	[2.8]	10	灰	ナデ	ナデ		
51-022	第23図-3	土師器	甕	4	15.5	-	[16.9]	85	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ		外面摩耗激しく調整不明瞭、脚土に黒母・長石
51-023	第23図-11	土師器	甕	2-5-8-9-11	-	(8.5)	[25.2]	30	褐	ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ→ミガキ	ヘラケズリ	脚土に黒母・長石
51-024	第24図-1	須恵器	杯	1	-	(6.6)	[1.8]	5	灰	ナデ	ナデ→強雑ケズリ手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	
51-024	第24図-2	土師器	杯	6	12.7	5.9	8.0	80	橙褐	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り、無調整	
51-024	第24図-3	土師器	杯	5	(13.5)	6.5	3.5	70	橙褐	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り、無調整	
51-024	第24図-4	土師器	杯	16	(12.4)	(6.0)	4.3	20	赤褐	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り、無調整	
51-024	第24図-5	須恵器	小型壺	1	(6.6)	-	[4.0]	5	灰	ナデ	ナデ		
51-024	第24図-6	須恵器	甕	1-18	-	-	-	5	黄褐	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-024	第24図-7	須恵器	甕	3-11	-	(15.3)	[11.8]	5	灰	ナデ	タタキ→ヘラケズリ	無調整	脚土に黒母・長石
51-024	第24図-8	土師器	小型甕	8-10	-	6.6	[10.6]	30	橙褐	ナデ	ヘラケズリ	回転ヘラ切り→ナデ	
51-025	第24図-1	須恵器	杯	1-5	(13.6)	(7.8)	4.1	20	黒	ナデ	ナデ→強雑ケズリ手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	
51-025	第24図-2	須恵器	杯	1	-	8.4	[2.1]	20	灰褐	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	脚土に黒母・長石
51-025	第24図-3	須恵器	甕	3	-	-	-	5	黄褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-025	第24図-4	土師器	杯	4	(21.7)	-	[3.4]	5	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ		脚土に長石・黒母
51-025	第24図-6	須恵器	甕	1	-	(15.2)	[4.0]	5	黒褐	ヘラナデ	タタキ→ヘラケズリ	無調整	
51-025	第24図-7	須恵器	甕	1	-	(11.0)	[4.5]	5	黒褐	ヘラナデ	ヘラナデ	無調整	
51-027	第25図-1	土師器	杯	36	13.65	6.5	4.6	100	褐	ナデ	ナデ→強雑ケズリ回転ヘラケズリ	回転糸切り→回転ヘラケズリ（外周）	
51-027	第25図-2	土師器	杯	24	(13.1)	-	[3.2]	10	黄褐	ナデ	ナデ→強雑ケズリ手持ちヘラケズリ	回転糸切り→回転ヘラケズリ（外周）	
51-027	第25図-3	土師器	杯	4	-	(7.0)	[2.7]	10	褐	ナデ	ナデ→強雑ケズリ回転ヘラケズリ	回転糸切り→回転ヘラケズリ（外周）	
51-027	第25図-4	須恵器	甕	9	-	-	-	5	灰	ナデ	ナデ		大型甕の胴部、外面に波状櫛描文
51-027	第25図-5	土師器	甕	2-3-5-38-29-31-35-40	(24.9)	-	[19.3]	50	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		
51-027	第25図-6	土師器	甕	23-26-30-32-33-34-35-37-39-40-41-42-44	(18.2)	(11.2)	18.9	50	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ	手持ちヘラケズリ	口縁部片口状
51-027	第25図-7	土師器	甕	1-8-18	-	(10.2)	[6.8]	10	褐	ナデ	ヘラケズリ→ヘラナデ	ヘラケズリ	
51-027	第25図-8	須恵器	瓶	1	-	-	-	5	黒褐	ナデ	ナデ	無調整	底部外面ヘラ書
51-027	第25図-9	須恵器	瓶	16	-	-	-	5	灰	ナデ	ナデ	底部内面横刷	
51-028	第26図-1	土師器	甕	1	-	-	-	5	褐	ナデ			
51-029	第26図-1	須恵器	杯	1	-	-	[2.9]	5	灰	ナデ	ナデ		脚土に黒母
51-029	第26図-2	土師器	杯	16f-1	-	(7.0)	[2.3]	20	黄褐	ナデ	ナデ	回転糸切り→回転ヘラケズリ（外周）	体部内面横位暗文帯（得）の痕跡分
51-029	第26図-3	須恵器	甕	2	-	-	-	5	灰	ナデ	タタキ→ヘラケズリ		脚土に黒母・長石
51-029	第26図-4	土師器	小型甕	1	(13.0)	-	[3.0]	5	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ		
51-030	第26図-1	須恵器	杯	1	(13.3)	(7.0)	4.2	20	黒褐	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	
51-030	第26図-2	須恵器	瓶	1	-	-	-	5	黒褐	ヘラナデ	タタキ		脚土和（粘手のキザメント）脚与付け
51-030	第26図-3	土師器	甕	2	-	7.0	[14.4]	20	褐	ヘラナデ	ヘラナデ		土付底、脚土に長石
51-031	第27図-1	須恵器	杯	2-3	(13.6)	(6.9)	4.4	30	黒	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（全面）	
51-031	第27図-2	須恵器	杯	1	(12.4)	-	[3.8]	5	黒灰	ナデ	ナデ		
51-032	第27図-1	須恵器	蓋	1	-	-	[2.7]	5	灰	ナデ	ナデ		脚土に白色微粒 盤の可能性
51-032	第27図-2	須恵器	杯	5-7	13.6	6.5	4.6	70	赤褐	ナデ	ナデ→強雑ケズリ回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ→ナデ	脚土に黒母・長石
51-032	第27図-3	須恵器	杯	1-7-8	12.4	6.7	4.0	90	橙褐	ナデ	ナデ→強雑ケズリ手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
51-032	第27図-4	須恵器	杯	1-9	(12.2)	(6.0)	4.35	20	灰	ナデ	ナデ→強雑ケズリ回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ（全面）	
51-032	第27図-5	須恵器	杯	1	(13.1)	-	[2.6]	10	褐	ナデ	ナデ		
51-032	第27図-6	須恵器	杯	3	-	6.8	[1.9]	20	黒褐	ナデ	ナデ→強雑ケズリ手持ちヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（全面）	
51-032	第27図-7	土師器	杯	1-11	15.2	8.0	5.7	60	赤褐	ナデ	ナデ→強雑ケズリ手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	口縁部内外面に油煙付着
51-032	第27図-8	土師器	杯	1	(14.2)	-	[3.6]	10	黄褐	ナデ→ミガキ	ナデ→強雑ケズリ		内面黒色処理
51-032	第27図-9	土師器	高台付杯	1-10	-	6.5	[3.3]	20	橙褐	ナデ→ミガキ	ナデ	高台貼り付け後ナデ	内面黒色処理
51-032	第27図-10	須恵器	甕	1	-	(13.8)	[7.9]	10	赤褐	ナデ	ヘラケズリ→ヘラナデ	手持ちヘラケズリ	
51-032	第27図-11	須恵器	甕	5-6	(25.6)	-	[12.5]	10	黒褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-033	第28図-1	須恵器	杯	2	13.1	8.3	4.0	95	灰	ナデ	ナデ→強雑ケズリ手持ちヘラケズリ	回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ（全面）	脚土に黒母
51-033	第28図-2	須恵器	杯	1	(13.7)	(6.8)	4.0	20	褐	ナデ	ナデ→強雑ケズリ手持ちヘラケズリ	回転ヘラケズリ	
51-033	第28図-3	土師器	杯	1	(11.6)	-	2.8	25	褐	ナデ→ミガキ	ナデ→手持ちヘラケズリ		赤ロクロ
51-033	第28図-4	土師器	杯	1	(13.7)	(7.0)	[4.8]	25	褐	ナデ	ナデ	回転糸切り	
51-033	第28図-5	土師器	杯	8	(11.6)	-	[3.8]	25	赤褐	ナデ→ミガキ	ナデ→手持ちヘラケズリ		赤ロクロ
51-033	第28図-6	土師器	高台付甕	1	-	-	[3.9]	20	褐	ナデ→ミガキ	ナデ	手持ちヘラケズリ→高台貼り付け後ヨコナデ	内面黒色処理
51-033	第28図-7	須恵器	甕	1	-	-	-	5	橙褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-033	第28図-8	須恵器	壺	1	-	(8.7)	[6.2]	10	灰	ナデ	ヘラケズリ→ナデ	手持ちヘラケズリ→高台貼り付け後ヨコナデ	高台付き、底部内外面自然釉付着
51-033	第28図-9	土師器	甕	4	(19.8)	-	[9.2]	10	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		脚土の長石・黒母

遺構番号	神図番号	器種	器種	遺物No.	口径	底径	器高	遺存度(%)	色調	内面調整	外面調整	底部調整	備考
51-033	第28図-10	土師器	小型甕	10	-	7.5	[9.4]	30	暗褐	ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ	無調整	底部本葉痕
51-033	第28図-11	土師器	甕	1	-	-	-	5	黒	ナデ	ナデ	無調整	底部外面漏斗「大」
51-033	第28図-12	土師器	甕	1	-	-	-	5	赤褐	ナデ		無調整	
51-034	第27図-2	土師器	高	3	(16.2)	-	[2.5]	50	黒	ナデ	ナデ→回転ヘラケズリ		
51-034	第27図-2	土師器	杯	1	(12.8)	-	[2.7]	5	赤褐	ナデ	ナデ		
51-034	第27図-3	土師器	甕	1	(22.2)	-	[7.2]	5	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ナデ		脚土に長石・雲母
51-035	第29図-1	土師器	杯	63-66-84	13.5	7.0	4.5	90	褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	脚土に白色粒
51-035	第29図-2	土師器	甕	84-86	(20.0)	-	[32.0]	10	灰褐	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→タタキ		脚土に黒色粒
51-035	第29図-3	土師器	甕	65-80-87	(21.6)	-	[13.2]	10	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-035	第29図-4	土師器	甕	33-35-50	-	(9.5)	-	10	褐	ナデ	ヘラケズリ→ヘラナデ	無調整	
51-035	第29図-5	土師器	甕	49-50-53-54-77-88	(19.3)	-	[14.2]	20	黒褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ		
51-036	第29図-1	土師器	杯	4	13.6	7.3	4.1	60	褐	ナデ	ナデ→体部下位回転ヘラケズリ	回転糸切り→回転ヘラケズリ（外周）	
51-036	第29図-2	土師器	杯	1	13.3	7.0	4.95	100	黒褐	ナデ	ナデ→手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
51-036	第29図-3	須恵器	甕	9-10-14-18	-	-	-	5	赤褐	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-036	第29図-4	土師器	小型甕	2-5-11-12-13-15-16-17	(12.2)	6.2	15.0	80	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ	手持ちヘラケズリ（全面）	
51-036	第29図-5	土師器	鉢車	5-6-8	16.0	-	[37.4]	30	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ→ナデ		
51-037	第30図-1	須恵器	杯	106-107	(13.6)	7.2	4.3	60	暗褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	内面灰色
51-037	第30図-2	土師器	高台付椀	150	14.2	7.6	2.6	60	褐	ナデ	ナデ	高台貼付付後ナデ	
51-037	第30図-3	土師器	杯	91-93	13.6	6.6	4.2	60	暗褐	ナデ	ナデ	手持ちヘラケズリ（全面）	
51-037	第30図-4	土師器	杯	146	(12.4)	6.1	4.1	70	暗褐	ナデ	ナデ	不明	
51-037	第30図-5	土師器	杯	134	13.6	6.8	4.4	60	灰褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
51-037	第30図-6	土師器	杯	106-145	12.9	5.3	4.1	80	黒褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
51-037	第30図-7	土師器	杯	20	(13.4)	(6.6)	4.0	10	黒褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	ヘラケズリ	
51-037	第30図-8	土師器	杯	153	-	6.8	[1.2]	10	黄褐	ナデ	不明	不明	内外面摩耗激して調整不明瞭
51-037	第30図-9	土師器	杯	107	-	(8.0)	[1.1]	5	暗褐	不明	不明	不明	内外面摩耗激して調整不明瞭
51-037	第30図-10	土師器	高台付杯	151	-	7.8	[2.5]	10	褐	ナデ	ナデ	高台貼り付け後ナデ	
51-037	第30図-11	土師器	台付椀	48-139	-	11.1	[5.7]	30	赤褐	ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ→ヨコナデ		
51-037	第30図-12	土師器	小型甕	148	(12.0)	-	[4.0]	5	赤褐	不明	不明		内外面摩耗激して調整不明瞭
51-037	第30図-13	土師器	小型甕	1-17	-	6.2	[3.3]	5	暗褐	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	
51-037	第30図-14	須恵器	甕	72-80	(26.0)	-	[8.1]	5	灰褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-037	第30図-15	須恵器	甕	151	(30.0)	-	[10.0]	5	褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		脚土にスコリア
51-037	第31図-16	須恵器	甕	137	(30.0)	-	[20.7]	10	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-037	第31図-17	須恵器	甕	96-110	(31.0)	-	[6.5]	5	黒褐	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-037	第31図-18	須恵器	甕	143	(21.8)	-	[17.0]	5	暗褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-037	第31図-19	須恵器	甕	141	(20.8)	-	[9.2]	5	暗褐	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-037	第31図-20	須恵器	甕	58-63-64-106-173-177	14.4	-	[9.4]	15	灰	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→ナデ		
51-037	第31図-21	須恵器	甕	109-110-149	(19.6)	-	[11.0]	15	灰	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-037	第31図-22	須恵器	甕	73-106-108	-	(15.4)	[10.0]	5	灰褐	ナデ	タタキ→ヘラケズリ	無調整	
51-037	第31図-23	土師器	甕	131	19.6	-	[22.9]	30	暗褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ		脚土に長石・雲母
51-037	第31図-24	土師器	甕	18-27-31-79-106-114-131-132-138-142-155-177	-	8.5	[21.2]	60	褐	ナデ	ヘラナデ→ヘラミガキ	ヘラケズリ	脚土に長石・雲母
51-038	第32図-1	土師器	杯	77-93	13.3	6.8	4.2	95	黒褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
51-038	第32図-2	土師器	高台付椀	477-6	13.6	7.0	3.1	70	暗褐	ナデ	ナデ	高台貼り付け後ナデ	
51-038	第32図-3	須恵器	甕	84	(25.0)	-	-	5	黒褐	ヨコナデ	ヨコナデ		
51-038	第32図-4	須恵器	甕	477-3-4-5	(26.0)	-	[16.9]	20	赤褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-038	第32図-5	須恵器	甕	74	(28.6)	-	[11.4]	10	黒褐	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→タタキ		
51-038	第32図-6	須恵器	甕	41-62	-	-	-	10	赤褐	ナデ	タタキ→ヘラケズリ		
51-038	第32図-7	須恵器	甕	59-63-65	-	(15.5)	[5.8]	10	灰褐	ナデ	タタキ→ヘラケズリ	無調整	底部外面ハケ書
51-038	第32図-8	須恵器	甕	27-52	-	(16.9)	[6.6]	10	灰褐	ナデ	ヘラケズリ	無調整	
51-038	第32図-9	土師器	甕	78-80	-	-	-	5	黄褐	ヘラナデ	ヘラナデ→ヘラミガキ		脚土に長石・雲母
51-039	第33図-1	土師器	椀	8	13.75	6.4	2.45	60	赤褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ（全面）	
51-039	第33図-2	土師器	杯	6	-	(7.6)	[2.2]	10	暗褐	ナデ	ナデ→体部下位手持ちヘラケズリ	ヘラケズリ	内外面摩耗激して調整不明瞭

第３章　まとめ

第１節　調査成果の概要（第 42 図）

嶋越遺跡における３か年の調査によって，計 14,592㎡を発掘調査し，奈良・平安時代を中心とする集落の存在が明らかとなった。ただ，近世から現代に至るまでの集落と重なっていたため，個々の遺構の遺存度は総じて悪く，近世以降の諸種の造成工事などによって完全に失われた遺構もかなりあったものと推測される。それでも，かろうじて壁下部と床面だけが残るような遺存度の悪い住居跡なども確認し，古墳時代後・終末期～奈良・平安時代にかけて営まれた住居跡 30 軒あまりの調査を完了した。

弥生時代以前の遺構及び遺物は別に報告されるので，古墳時代以降についてのみ概観すると，古墳時代前期から中期の遺構は確認されなかった。ただ，トレンチ調査などで古墳時代前期の遺物が若干検出されているので，既に失われたのか，それとも発掘区外に存在するのか不明であるが，前期の住居跡も少数ながらも営まれていたことは確実と思われる。微細な破片であるがＳ字状口縁甕形土器Ｃ類の口縁部，柱状部に櫛描き直線文の施された高杯の破片が検出されたことは特筆される。ともに東海地方の西部，伊勢湾沿岸地域の特徴をもち，特にＳ字状口縁土器の胎土は在地のものとはみえないので，搬入された遺物の可能性が考えられる。古墳時代成立期における文物の交流を示す貴重な資料といえるだろう。

古墳時代後・終末期の住居跡は調査区北端の台地平坦部にあり，それ以降の住居跡が斜面部を中心に分布しているのと好対照をみせる。調査区の北に広がる台地平坦部，現在の物井集落の中心部にかけて同時期の集落が展開している可能性が考えられる。

奈良・平安時代の集落は，調査区北側と南側の斜面部でのみ確認された。発掘区中央部の台地平坦部では１軒も検出されなかったが，この区域が近世から現代までの集落に重なり，たび重なる各種造成工事によって遺構が失われた結果であろう。集落の立地として最も好適な場所に竪穴住居が全く営まれなかったというようなことは，物井地区の他の集落遺跡の状況からみてあり得ないことといえよう。斜面部のかなり下部まで住居跡が営まれているのは，小屋ノ内遺跡や稲荷塚遺跡などには見られない状況である。嶋越遺跡は鹿島川が形成した沖積低地に直接面するという好立地を有しているので，そこを生産基盤とする農民の住宅需要が大きかったことが，この様な斜面に竪穴住居を建てさせる要因になったものと想像できる。個々の竪穴住居跡は遺存度の悪いものが多く，斜面に立地するため谷側の床面が把握されていないものなどもあって，全容が判明するものは少ないが，この時期の住居跡として通有の形状・規模を有し，付属施設などを含め特記すべきものはあまりない。

竪穴住居の時期については，土器類の推定年代[1]から，次の様な変遷が考えられる。

７世紀後葉：SI-016・017（北部）

８世紀前葉：SI-014（北部）

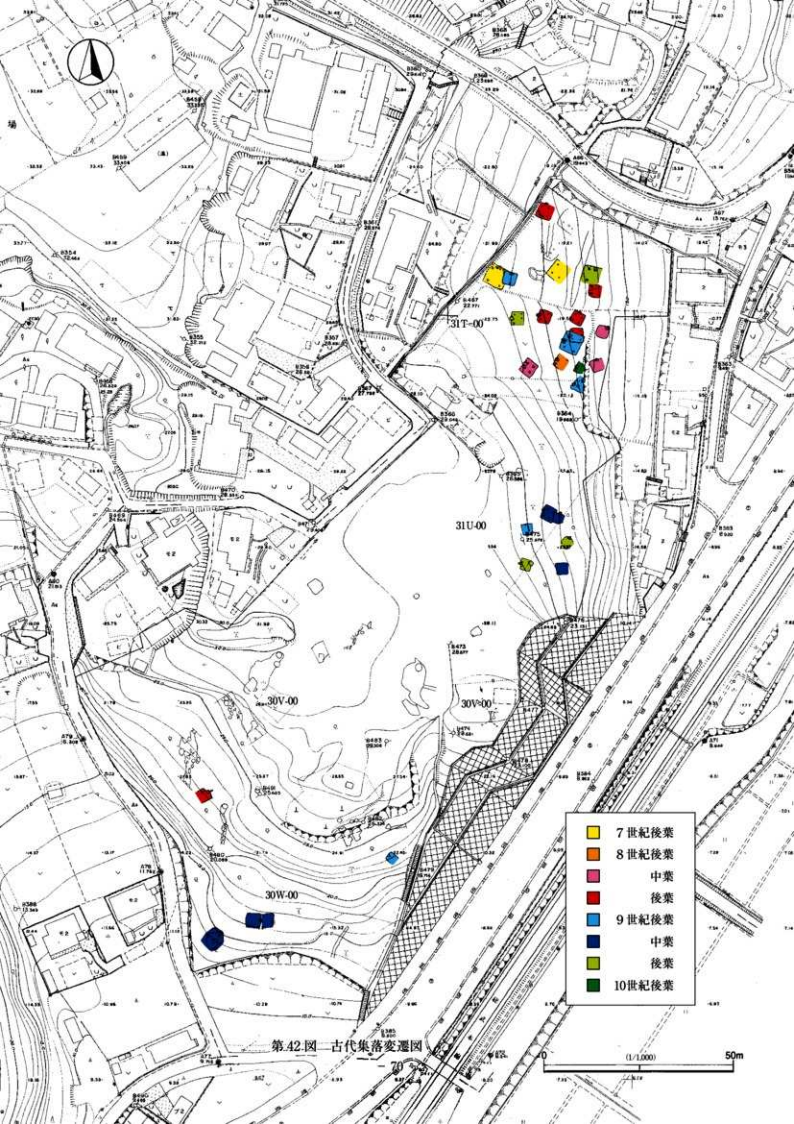
８世紀中葉：SI-013・021・022（北部）

８世紀後葉：SI-010・011・015（北部）・035（南部）

８世紀末～９世紀初頭：SI-018・019（北部）

９世紀前葉：SI-009・012・025（北部）・029（中央部）・036（南部）

９世紀中葉：SI-030・032・033（中央部）・037・038・039（南部）



第42図 古代集落変遷図

9世紀後葉：SI-008・020（北部）・027・031（中央部）

10世紀前葉：SI-024（北部）

これによると，台地上の集落は削平等により様相が不明であり，出土遺物が少なく時期不明の住居跡もあるが，斜面部については，8世紀前葉（SI-014）と10世紀前葉（SI-024）の各1軒を除いて，北部では7世紀後葉～10世紀前葉まで，中央部では9世紀前葉～後葉，南部では8世紀後葉～9世紀中葉に，いずれの地区も各時期で2～3軒ずつの小集落として存続したことが想像できる。なお，8世紀末～9世紀初頭とみられるSI-018・019は，古代集落変遷図（第42図）では時期の均等区分上，8世紀後葉に含めている。基本的に1世紀を3期に区分したが，前後の時期にまたがる可能性のものを無理に該当させているので，当時の実態には合わないであろうが，集落変遷の傾向としては明らかとなったと考えられる。

中世以降については，遺物の時期は15世紀後半～19世紀後半までほとんど途切れることなく連続する[2)]。全体的傾向としては，中世遺物は極めて少ないが，15世紀後半の内耳土鍋（SX-013），16世紀代の土製擂鉢（SK-013）16世紀中葉の瀬戸・美濃産擂鉢（SK-008付近），16世紀後半のカワラケ（SX-010）がある。近世については，土器は17世紀代主体のカワラケや内耳土器，磁器は18世紀前半の肥前産，陶器は18世紀後半の瀬戸・美濃産が主体で，19世紀代の瀬戸・美濃産磁器は微量であり，全体では18世紀代が主体である。性格不明の土坑や溝が多く検出されたが，中世の遺構と断定できるものはなく，ほとんどが江戸時代以降から現代にかけて，住居建設や農作業などに伴って掘り込まれたものと思われる。台地上は平安時代後期～中世前期までの痕跡がなく，15世紀以降徐々に開発され，江戸時代後期以降には物井集落の一部として現代まで継続されたことが想像される。

第2節　灰釉浄瓶および上総型土師器杯について

住居跡からの出土遺物は，土師器・須恵器・土製支脚・鉄製刀子・紡錘車といった通有の遺物にほぼ限られるが，SI-014で灰釉浄瓶（第18図8）と上総型土師器杯（第118図7）の破片が出土している点は注目される。

浄瓶は僧侶の持物とされ，県内での類例を見ても，上総・下総両国分寺や山武市真行寺廃寺跡などの寺院跡で出土している。このほか，「草苅於寺坏」の墨書土器が出土した市原市草刈遺跡K区，「寺塔」「寺」「佛」墨書の同市萩ノ原遺跡，「大寺」「佛」墨書の八千代市白幡前遺跡，「寺」「仏」「法」の大網白里市砂田中台遺跡など，寺の存在をうかがわせる墨書土器や鉄鉢形土器等仏教関係遺物や仏堂とみられる掘立柱建物跡が検出された遺跡で出土している。

SI-014で出土した浄瓶は，頸部のみの破片であり，出土状況から，破損後に廃棄され混入したものとみられる。この浄瓶が本来集落内のどこで使用されていたか不明であるが，他遺跡の事例からみて，本遺跡にも掘立柱建物の仏堂，いわゆる村落内寺院が存在した可能性は高く，仏事に用いられていたと推測される。今回の調査では掘立柱建物跡2棟が検出されたが，半分以上失われて全容が不明である。柱の配置は整然としておらず，廂の存在も不明で，仏堂の跡とは認められない。ほかに仏教関係の遺物は出土していないものの，集落内のどこかに掘立柱建物の仏堂があった可能性は十分考えられる。

上総型杯は，口縁部から底部のごく一部が遺存するのみであるが，内面に上総型杯の特徴である斜格子暗文が認められる。また，体部外面には上総型杯に通有な，口縁部ヨコナデ後の横方向のヘラケズリ調整が施されている。上総型杯は底部にやや丸みを残した平底を呈するという特徴を有するが，おそらくこれ

も同様の形状であるものと考えられる。

7世紀末から8世紀初頭にかけて，畿内の律令的土器様式の影響を受けて，東国各地で新型式の杯が出現するが，当該期の房総半島では上総型杯がこれに該当する。上総型杯の特徴の一つである斜格子暗文は，畿内産土師器の影響下に成立したとされているものの，畿内産土師器の暗文には斜格子は皆無であり，その系譜の原点は解明されておらず，上総型杯が有するであろう特殊な性格についても不明な点が多い[3]。

斜格子暗文杯の分布状況は，ほとんどが房総半島に集中しており，他県の出土例はごく僅かで，旧上総国北部に集中している。千葉県内約80遺跡の出土例のうち，安房国が1遺跡，下総国では7遺跡で，その他は上総国からの出土である。下総国における分布は，7遺跡中4遺跡が上総国との国境沿いに集中している[4]。共伴遺物として畿内産土師器が多数出土する例や，国替えの儀式が執り行われたのではないかと考察されている遺跡からの出土が特筆される。本遺跡の場合も先述の浄瓶がある。

SI-014の時期は8世紀前葉であり，本遺跡で検出された該期の住居跡はこの1軒のみである。その後，周囲の北部斜面部では10世紀前葉にかけて存続し，中央部斜面や南部斜面では主に9世紀代に集落が展開する。つまり，灰釉浄瓶と上総型土師器斜格子暗文杯が出土したSI-014が本遺跡の奈良・平安時代の集落では草分け的な住居であることが想像でき，これらの遺物が有する畿内や僧侶との関係と併せて注目されるものであろう。

注1　糸川道行　2006「第7章まとめ」「四街道市小屋ノ内遺跡（2）　－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－」（財）千葉県教育振興財団　ほかを参考とした。

2　堀内秀樹　1996「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」「シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ　発表要旨資料集」江戸陶磁土器研究グループ　／　水本和美　1998「陶磁器・土器分類・計測基準」「伝中・上富士前Ⅱ」豊島区遺跡調査会　／　野上建紀　2000「（肥前）磁器の編年」「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会などを参考とした。

3　佐久間豊　1993「斜格子暗文を有する土師器杯について」「史館」15　史館同人

4　大岩桂子　2012「房総における斜格子暗文杯の分布　－斜格子暗文杯の特殊性について－」「研究連絡誌」第73号（財）千葉県教育振興財団／　同　2013「上総型斜格子暗文杯の再検討」「考古学の諸相Ⅲ　坂詰秀一先生喜寿記念論文集」立正大学考古学会

写　真　図　版

図版 1

遺跡周辺航空写真（縮 1/10,000　昭和 44 年撮影）

図版 2

調査前遠景
（南東から）

調査区中央部建物
敷地部分（北から）

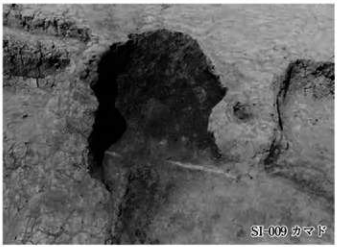
調査区中央部
（南から）

SI-008

SI-008 カマド

SI-008 遺物出土状況

SI-009・017


SI-009 カマド

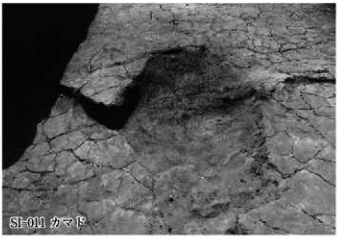
SI-017 カマド

SI-010

SI-010 カマド

図版 4

SI-011


SI-011 カマド

SI-012

SI-012 カマド

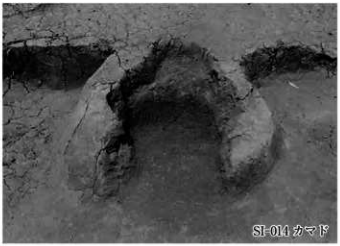
SI-013

SI-013 遺物出土状況

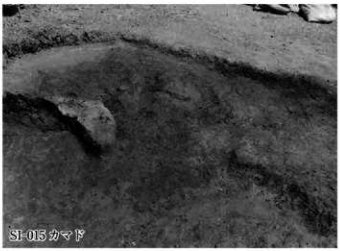
SI-013 カマド

SI-014

SI-014 カマド内遺物出土状況


SI-014 カマド

SI-015


SI-015 カマド

SI-016

SI-018

SI-019

SI-019 カマド

図版 6

SI-020

SI-020 カマド内遺物出土状況

SI-020 カマド

SI-021

SI-021 遺物出土状況

SI-021 カマド

SI-022

SI-022 遺物出土状況

SI-022 カマド

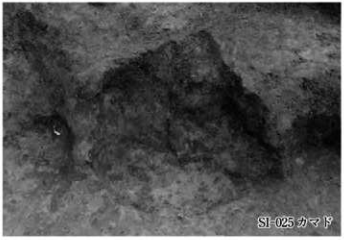
SI-023 カマド

SI-023 カマド内遺物出土状況

SI-024

SI-024 カマド内遺物出土状況

SI-025


SI-025 カマド

SI-027

図版 8

SI-027遺物出土状況

SI-027 カマド

SI-028

SI-029 カマド

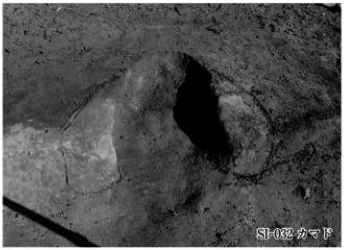
SI-030

SI-031 カマド

SI-031

SI-031 カマド

SI-032

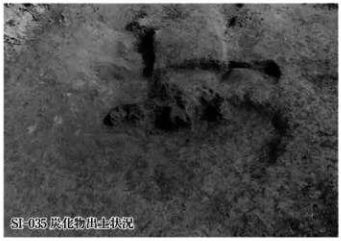

SI-032 カマド

SI-033

SI-033 カマド

SI-034 カマド

SI-035


SI-035 焼土遺物出土状況

SI-036

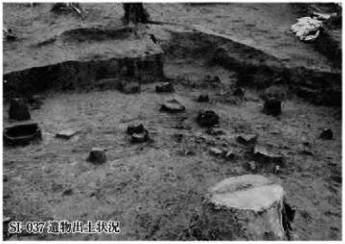
図版 10

SI-036 遺物出土状況

SI-036 カマド

SI-036 煙道断面

SI-037


SI-037 遺物出土状況

SI-038

SI-039

SB-002

SK-001

SK-013 遺物出土状況

SD-001

SD-002

SK-004

SK-005

SK-006

SK-011

図版 12

SK-033

SK-034

SK-034 人骨出土状況

SK-011

SK-021 土層・SK-038

SK-038

SK-021・038

SK-012

図版 14

SK-035

SK-036

SK-020

SK-020 遺物出土状況

SK-018・019

SK-050

SK-052

SK-053

SI-009-2

SI-009-4

SI-009-13

SI-009-15

SI-009-16

SI-010-4

SI-011-2

SI-011-4

SI-013-3

SI-013-4

SI-013-5

SI-013-12

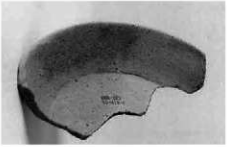
SI-013-13

SI-013-17

SI-013-18

SI-014-2

SI-014-5



SI-014-7

SI-014-8

住居跡出土遺物（1）

SI-014-9

SI-014-12

SI-015-1

SI-015-5

SI-017-1

SI-017-2

SI-017-4

SI-017-5

SI-019-1

SI-019-6

SI-020-1

SI-020-3

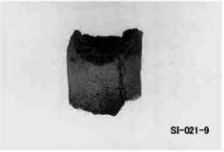
SI-020-6

SI-020-9

SI-020-10

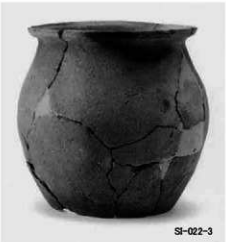
SI-021-2

SI-021-8


SI-021-9

住居跡出土遺物（2）

SI-022-1


SI-022-3

SI-024-2

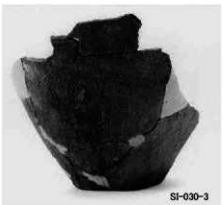
SI-024-3

SI-024-8

SI-027-1

SI-027-5

SI-027-6


SI-030-3

SI-031-1

SI-032-2

SI-032-3

SI-032-4

SI-032-7

SI-033-1

SI-033-9

SI-033-11

SI-034-1

SI-035-1

住居跡出土遺物（3）

SI-035-5

SI-036-1

SI-036-2

SI-036-4

SI-036-5

SI-037-1

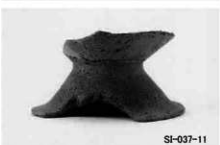
SI-037-2

SI-037-3

SI-037-4

SI-037-5

SI-037-6


SI-037-11

SI-037-21

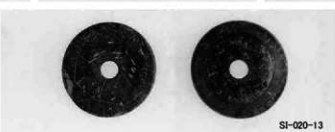
SI-037-24

SI-037-25

SI-038-1

SI-039-1

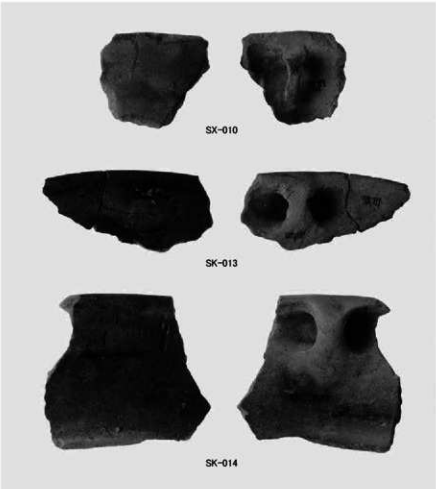
SI-013-26


SI-020-13

SI-020-14

住居跡出土遺物（4）

住居跡出土遺物（5）



その他の遺構出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	よつかいどうししまこしいせき （1） こふんじだいいこうへん
書　　名	四街道市鳴越遺跡（1） 古墳時代以降編
副　書　名	物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	XⅦ
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第 732 集
編 著 者 名	大岩桂子
編 集 機 関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所　在　地	〒 284-0003　千葉県四街道市鹿渡 809 番地の 2　　TEL 043-424-4848
発行年月日	西暦　2014 年　9 月　12　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しまこしいせき 鳴越遺跡	よつかいどうしもの い 四街道市物井 あざなまこし 字鳴越 464 ほか	228	023	35 度 41 分 06 秒	140 度 11 分 55 秒	20090216 ～ 20090325 20090406 ～ 20090520 20090701 ～ 20100226 20100701 ～ 20100730 20100831 ～ 20101208	1,652㎡ 990㎡ 5,850㎡ 6,100㎡	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳴越遺跡	集　落　跡	古墳時代	竪穴住居跡　2 軒	土師器，須恵器，土製品，石製品，鉄製品	奈良・平安時代では，灰釉浄瓶・上総型斜格子暗文土師器杯の出土や集落変遷が注目される。
		奈良・平安時代	竪穴住居跡　30 軒	土師器，須恵器，土製品，石製品，鉄製品	
	集　落　跡 墓　　地	中・近世	台地整形区画　6 箇所 井戸　2 基 土坑墓　4 基 土坑　42 基 ピット　30 基 溝状遺構　6 条	陶磁器，土器，石製品	

要　約	緩斜面から 7 世紀後葉～ 10 世紀前葉の集落が検出された。中・近世は，台地整形区画内に土坑群が展開する。台地上の古代集落は，近世以降の集落や造成によって損壊を受けたことが推測できる。

千葉県教育振興財団調査報告第 732 集

四街道市嶋越遺跡（1）

古墳時代以降編

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ－

平成 26 年 9 月 12 日発行

編　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団

発　行　独立行政法人　都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿６－５－１

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の２

印　刷　株式会社　エリート情報社［印刷出版局］
成田市東和田 415－10